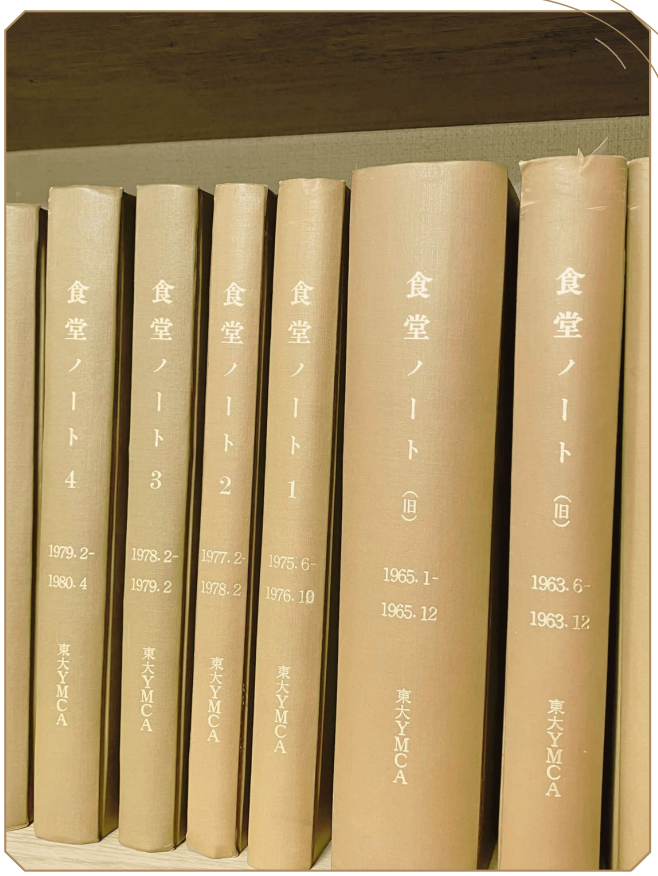
第２章
卒舎生寄稿エッセイ



目　次

森有正と木下順二　大口 邦雄（1956 年理卒）..... 19
旧舎の思い出とクリスマスプレゼント　二神 康郎（1960 年農卒）..... 21
東大 YM 寮舎生としてすごした日々　小出 達夫（1963 年教育卒）..... 23
バッハのカンタータを歌い続けた東大 YMCA コーラス　関澤　純（1966 年農卒）..... 25
東京大学 YMCA の思い出　久保田 信行（1967 年法卒）..... 27
富永 徹 さん のこと　垣内 史堂（1970 年医卒）..... 29
東大 YMCA 会館・寄宿舎　建設小史　岩見 宣治（1971 年工卒）..... 31
気になる“先輩”　篠原 正雄（1971 年理卒）..... 37
旧舎から新舎へ　清水 正之（1971 年文卒）..... 39
東大 YMCA 寮から戴いたもの　半田 武比古（1977 年工卒）..... 41
はるかなる東京大学 YMCA　山口 栄一（1977 年理卒）..... 45
ウズラなんですけど　小林 辰美（1977 年文卒）..... 47
私にとっての東大 YMCA　柿谷 均（1977 年理卒）..... 49
東大 YMCA 新舎という出来事　合田 隆史（1978 年法卒）..... 51
寄宿舎の思い出　西　正典（1978 年法卒）..... 53
シンプル　イズ　ベスト　灰本 周三（1978 年経卒）..... 55
東京大学 YMCA の思い出　倉光 泰隆（1978 年法卒）..... 57
呑喜と南洲屋と…　飯島 康一（1980 年経卒）..... 59
東大 YMCA 寄宿舎にいた頃　高谷 武良（1982 年法卒）..... 61
東京大学 YMCA 会報によるつながり－預言など投稿　近藤 信和（1987 年法卒）..... 63
岩井要先生と青い祈祷室　岩佐 明彦（1994 年工卒）..... 65
東大 YMCA の今昔　五百旗頭　薫（1996 年法卒）..... 67
1980 年代以降の 20 年間における、寄宿舎としての東大 Y の変化と不変
　中村 義哉（2000 年経卒）..... 73
東大 YMCA なくして我が信仰なし　関　智征（2003 年法卒）..... 77
兄に囲まれた長男　田川 義之（2004 年工卒）..... 79
東大 YMCA 寮で過ごした日々　三浦 真（2006 年経卒）..... 81
東大 YMCA のおかげさまで　半田 淳比古（2008 年医卒）..... 83
熟議を尽くす—寄宿舎生活を振り返って 木原　盾（2015 年文卒）..... 85
与えられた恵み　木原（金子）友紀（2017 年教育修士修了）..... 87
神様を求める気持ちを大切に　徳永（草間）友花（2018 年工博士修了）..... 89

森有正と木下順二

大口 邦雄（1956 年理学部数学科卒）
在舎 1954 年 4 月―1958 年 3 月



略歴・近況：
本会第 10 代理事長。
国際基督教大学にて、教養学部長、宗教音楽センター所長、理学科長、学務副学長などを歴任。
1992 年～1996 年 国際基督教大学学長。
2004 年～2008 年 恵泉女学園 学園長（2006 年まで恵泉女学園大学学長兼務）。
2023 年 春の叙勲「瑞宝中綬章」受章。

私が住んでいた頃の建物は、道路に面して会館があり、奥の部分に寮室と食堂、その奥に二舎と称する畳敷きの部屋があって、先輩達が何人か住んでいた。会館の二階に祈祷室と会堂があり、三階に三室ほど客間があって、私の在舎中、森有正さんがフランスから一時帰国して一年間滞在された。祈祷室で話しを伺う集会を催したが、食堂で夕食後など二舎の先輩たちと交わす議論に耳を傾けるのがもっと面白かった。その内容の多くは森有正全集の初めの方に収録されている。

森さんは変わった面白い人で、賄いの平沢さんというおばさんが、お昼食堂に行くと森さんが一人で饂飩を食べていた。見ると汁をかけずに食べている。「先生、おうどんはおつゆをかけて召し上がるものですよ」と入り口のコンロにかけたてあった大鍋の汁をかけてあげたら、「ほー、饂飩というものは汁をかけると実にうまいものですなあ」とひどく感心したそうだ。この種の逸話は山のようにあるらしい。独特の人柄は会った人でないとわからない。

入舎したばかりの頃、毎朝会館の方から異様な声が聞こえるので不思議に思ったが、ぶどうの会という劇団が会堂を借りて毎日練習をしていて、発声練習から始めるのだという。女性用のトイレなどなかったから、若い女優さんとトイレで鉢合わせするのがひどく恥ずかしかった。ぶどうの会は木下順二の作品を公演していた劇団である。それと認識してはいなかったが、山本安英さんと鉢合わせしたこともある。目立たない普通のおばさんだった。

その頃クリスマスには午前中礼拝が行われ、午後近所の子供たちを集めて生誕物語やクリスマス賛美歌を歌わせたりしていた。劇団の俳優さんが『マッチ売りの少女』を、美しく物悲しいピアノかハープの旋律をバックグラウンドで流しながら朗読した。さすがに専門家は違うなと感心した。次の年は、夜の祝会だったか、数人の男女の俳優さんが台本を片手に、立って位置を変える程度の簡単な所作をつけながら中国の民話を朗読した。これが実に面白かった。ああいうやり方なら、少し指導して貰えば素人の僕らでもできるな、とこれも感心しながら観たものである。

入舎して二年目から私は学生理事を務めた。公演が近づく頃、招待券が理事会に届けられ、貧乏学生の私に、図らずも「夕鶴」を観る機会が与えられた。見終わった時私は異様な感動に

襲われ、それからの数日呆けたように何も手につかなかった。それは外側から来たにも拘らず、何かひどく懐かしいもの、自身の心の奥深いところに沈んでいたもの、忘れかけていた何ものかであることに気づいた。それがいったい何なのか、折に触れては考えた。

戦後朝鮮半島から大分県の国東半島に引き揚げて来たのは十二歳の時である。以来六年半にわたる生活は貧しかったが、美しい大地に生きる優しい人々に囲まれて、実に幸せな毎日だった。後ろ髪を引かれる思いで、今や故郷となったこの地を後に上京して来たのである。私は西欧的学問研究を志し、数学者になりたいと願い、フランス語を習得した。宗教音楽に興味を抱き、オルガンやコーラスの技術を学び、日本が欧米先進諸国に劣らぬ文化国家になることに自分の生涯を捧げようと決心していた。戦後十年というこの時代、人々はみなアメリカの方を向いていた。古い日本と訣別してアメリカのようになることが進歩だと信じていた。そしてそれらはみな、学校教育の成果の延長上にあったのである。

そんな時に「夕鶴」を観て、学校教育で培って来たものとは質的に異なる何ものかに突然遭遇したのだ。それは私がそれまで意識的に考えたことのなかった、国東半島での生活体験に一つの意味を与えた。私の深層に横たわるこの日本文化の古層は、戦前・戦中に鼓吹された国粋主義とは別物である。農村には、そもそも臣民などという言葉はない。人々は自然の中で自然とともに、長い歴史を極めて現実的に生きて来たのである。戦争に勝とうが負けようが関係ない。国破れて山河あり。山河とは山や河のことだけではなく、自然とともにしなやかに生きている人々のことでもあることを知った。この体験は、「夕鶴」を観て初めて私の中で一つの経験になった。

森有正全集第一巻はフランス滞在中の思索的手記の形で書かれているが、「バビロンの流れのほとりにて」と題されている。森有正さんと木下順二さんは全く違った道を歩きながら、どこか深いところで繋がっていたのかもしれない。私は木下さんと直接お会いしたことはないが、この二人の先輩から、人格形成に少なからぬ影響を受けた。それは大学の講義では得られない種類のものである。東大 YMCA 寮の良き伝統だと思って感謝している。

旧舎の思い出とクリスマスプレゼント

二神 康郎（1960 年農学部農業経済学科卒）
在舎；1957 年 9 月～1960 年 3 月



略歴・近況：
愛媛県立松山北高校から東大を経て（株）東食入社、平成 8 年定年退職と同時に国際流通研究所代表となり現在に至る。
日本基督教団信濃町教会所属

旧舎の建物は木造ながら立派な 3 階建てのビルだった。建物の内部は現在の新舎と酷似していて、現在入居しているマンションから東大 YMCA の部分だけを切り取ってそのまま更地に置いた感じだった。しかし寄る年波から建物は古ぼけ、我々が住んでいた時の壁はすすがこびりついたような色具合で、天国と称された 3 階村を除き宿舎は全て薄暗かった。

スペースと入居者の点で旧舎が新舎と異なっている点は旧舎の建物の西隅に二舎と称する和風の部屋があり青年会活動を卒業してしまった大学院生が寝起きしていた。それ以外の部屋には全て学部の男子学生で埋まっていた。一方建物の東の隅には「ぶどうの会」と称する劇団の稽古場があり、常時劇団員が出入りしていた。

当時私が青年会の財務理事をしていた時の主な任務は青年会の財務管理で週一で来舎する大先輩で財務担当の高山さんとの青年会の入出金などの財産チェックだった。他に建物の屋上に設置してあった貯水タンクに梯子を伝って頻繁によじ登るのも任務の一部だった。貯水槽の水面には金属製の球体（ブイ）が浮かんでいてブイは水位に従って上下する仕組みになっていたが、ブイと貯水タンクの接点が錆びてブイが空中に取り残されると舎内全域が断水となる。その修復が財務理事の役目だった。

次は劇団「ぶどうの会」の思い出だ。ぶどうの会のメンバーは東大 YMCA のクリスマス祝会によく賛助出演してくれた。セリフだけの出演だがさすがプロだけあって喝采ものだった。

ぶどうの会は東大 YMOB の木下順二氏が主催、看板女優が山本安英さんであったが発足以来東大 YMCA 寮を稽古場所にしていた。代表的な出し物は「夕鶴」で海外で上演された最初の日本オペラと言われ、公演は国内外で 1037 回に及んだ。音楽担当は有名な団伊久磨氏で昨年開催された東大新舎発足 50 周年記念講演会で「宗教と建築物」と題し講演された OB の団紀彦氏のご尊父だ。

私も一度「夕鶴」を見たが少なからず感動した。木下順二先輩の代表作である芸術性に溢れたオペラの裏舞台をわれらの宿舎が務めたことは誇るべきことではないだろうか。「おつう」を演じた山本安英さんは押しも押されもせぬ大女優であった。「ぶどうの会」のぶどうの由来は知らないが新旧約聖書に頻繁に出てくる「ぶどう」から来たのかもしれない。

余談だが「ぶどうの会」に青木和子さんという女優がいた。もともと演出が希望だったが人数不足で女優として駆り出されたらしい。とてつもないチャーミングな方で YM の舎生の多く

が虜になった。中にはこっそり後をつけた同輩もいたらしい。70年も前の話しだが私にとって今でも忘れられない存在だ。といって会話したこともなく廊下で出会って会釈をする程度のお付き合いだったと思う。当時山本安英の相手役をしていた某男優の女であるとの噂もあった。

本稿を記すにあたりウイキペディアで青木和子を検索してみた。すると驚いたことに 1927 年生まれ 99 歳と記してある。1953 年ぶどうの会入団で、これまで結婚した形跡はなく今でも東京のどこかで暮らしているとみられる。

さて、YM のクリスマス祝会といえば、66 年前の YM のクリスマス祝会でのクリスマスプレゼント交換でマグカップをいただいた。プレゼントを渡す相手は決まっているが誰から受け取るかは全くわからないようになっている。これが尋常のマグカップではない。素焼きのカップに絵の具を使い筆でサンタクロースとキャンドルをカラフルに描き、1959.12.12.と日付を入れ Pour Futagami Joyeux Noel と書いたあとフランス語でマタイ 22 章 37〜39 節までを書き連ねたうえ再度薬を塗って焼いたものだ。

貰った時この送り主は萩野瑞さん（1965 年工卒 2023 年永眠）に違いないと思った。数少ないフランス語専攻者で、お互いとても親しくここまで手の込んだプレゼントをくれそうな人は他にいなかったからだ。しかしその後 40 年が経過した頃開かれた同期生による「さりげなく集う YM の会」で会った彼にそれを確かめたところ自分ではないという。これには当てが外れてがっかりすると同時に送り主が闇の中に消えてしまった。

それ以降も送り主の萩野説を私はしつこく信じ続けた。彼以外にフランス語が好きでこれほどできそうな人はいなかったし、彼が送り主を明かさぬ舎の方針を堅持しているかもしれないと思った。それで彼が 2023 年に亡くなり私が東大 YM の会報に思い出の記を書いた時マグカップのことに触れ今でも感謝していると書いた。

ところが会報が発行されて間もなく、萩野谷興君（1963 年法卒）から 1 枚の葉書が舞い込んだ。読めばマグカップを送ったのは私で銀座まで出かけ一日がかりで仕上げたのだという。送り主のことで迷走する私を見るに見かねて知らせてくれたのであろう。彼はドイツ語が第二外国語であったが当時 DEUX DIEU と名乗りフランス語を愛好していた私に合わせてフランス語を使ってくれたようだ。それにしても努力家の彼には改めて頭が下がる。

こういう訳で実にプレゼントを貰ってから 65 年ぶりについに送り主が判明しめでたし、めでたしとなった訳だがこれには後日譚がある。昨年度（2024 年度）の YM のクリスマス祝会の 3 分間スピーチで私はこのマグカップを皆さんに披露したいと思い、スピーチの直前取り出したところ手を滑らせて床に落とし、ばらばらに砕けてしまった。当たり前だがこの手の焼き物は落ちれば必ず砕けるようになっている。

スピーチはそこそこにして私は気まずい思いをしながら破片を拾い集めて持ち帰りセメダインで繋ぎ合わせなんとか復旧することができた。これで私の宝物は貰ってから 66 年経った今も筆立てとして私の仕事机の上を飾っている。

東大 YM 寮舎生としてすごした日々

小出 達夫（1963 年教育学部教育社会学科卒）

在舎　1961 年 4 月―1963 年 3 月



略歴・近況：

1938 年 長野県長野市生、1958 年 東京大学理科Ⅱ類入学、1963 年 東京大学教育学部教育社会学科卒業、1965 年 東京大学大学院教育学研究科修士課程修了、1965 年 青森県国民教育研究所所長、1969 年 東京大学大学院博士課程中途退学、1969 年 北海道大学教育学部教育行政学講座助手、1995 年 北海道大学教育学部教授、2002 年 北海道大学大学院教育学研究科教授退職、2002 年 北海道大学名誉教授。

北海道大学において、地域連携委員会を設けるなど、地方の教育関係団体や地域企業・北海道教育委員会とのパートナーシップ構築に従事。また、日韓シンポジウム、日米シンポや日本モンゴル教育交流の推進にも携わった。

私は 1959 年東京の信濃町教会で受洗、大学 1 年の時だ。福田正俊牧師からだった。しかし実際に私に決定的影響を与えたのは、長野教会の小原福治だ。高校を卒業して浪人をしていた時だ。実家の農業を手伝いながら、父の勧めで長野教会に行った。小原牧師は県下では有名な教師だった。退職して長野教会の牧師を無資格のまま務めていた。その説教は強烈な印象を私に与え、4 冊の本になって私の手元にある。彼はカントが好きで、世界史の中で最高の哲学者はカントだと再三口にした。カント以上の人間はいないとも言った。小原はキリストとカントと共に生活していた。今になってみると小原福治の言ったことが私にはよくわかる。彼は戦争にくみしなかった。敗戦直前、小学校校長として朝礼講話をした時、日本は負けると生徒に話した。一晩小原は警察に留置された。私が大学で教育学を専攻したのは小原福治の影響だったと今になって思う。

長野から東京に移り、小原福治の勧めで信濃町教会に行った。信濃町教会は東京の教会で、日曜礼拝に来ていた人は私にはどこか合わなかった。教会は人の集まりだ。福田牧師の話も長野の時とは違って聞こえた。私はいつの間にか教会から離れた生活を送るようになった。信仰から離れたわけではない。

私は駒場では理科Ⅱ類生だった。医学部を希望したが到底及ばなかった。本郷に移り、教育学部に再入学し、東大 YMCA 寮に宿舎を得た。移って早々研究室会議で東京外国語大学から移ってきた笠原真美さんに出会った。印象は強烈だった。私は真美さんに惹かれ、しばらくたち、いつしか行動を共にしていた。大学卒業前の 3 月笠原真美さんと結婚し、小原福治牧師の前で結婚した。大学院は、真美さんが社会教育を専攻し、私は教育行政学を専攻した。

この 2 年間の学部学生中、私たち二人は YM の皆さんに大変世話になった。大学の授業のない時には、YM 寮が近かったので、しばしば寮に二人で帰った。当時舎生は男子だけだったので、二人で舎の私の自室に行くのはちょっと気が引けたが、ほかに行く場所はなかった。舎の仲間たちは我々二人を許してくれた。学生仲間の結婚パーティには何人かの舎生の人が列席し

てくれた。特に諏訪さんや大豆生田さんなんかにはお世話になったし、迷惑もかけたと思う。

あれからすでに 60 年、今私は 87 歳になった。すでに真美さんは逝ってしまった。私の青春も遠く去った。私の行ける教会も見つからない。聖書も小原福治の本も手の届くところにある。私はロマ書が好きだ。しかしいまそれを読む余裕がない。読む時間はあるが、読まなければいけない本や資料がほかにある。まだ現役生のつもりだ。いつかは聖書と小原福治を中心とした生活に戻りたい。

バッハのカンタータを歌い続けた
東大 YMCA コーラス

関澤　純（1966 年農学部農芸化学科卒）
在舎 1962 年 4 月―1966 年 3 月



略歴・近況
東京都公害研究所、ニューヨーク州立大学、香料会社を経て、厚生省研究所で WHO の「国際化学物質安全計画(環境と健康への影響を科学的に評価し各国に周知)」を担当、徳島大学および食品安全委員会ほか。趣味は音楽と登山。福島原発事故被災者の支援を継続中

50 年少し前の話ですが、YMCA 会館竣工 50 周年記念特集号に思い出の一端を寄稿します。私の母方の祖父遠藤新は学生時代東大 YMCA に在籍、1916 年当時には追分寮設計を担当、関東大震災で損傷を受けた後も改修し、1976 年の改修まで多くの方が在籍、私も大学入学時から 4 年間在舎しました。現在も礼拝堂や椅子など以前の面影を偲ぶことができ懐かしさを感じます。私は高校音楽部で 3 年間ハイドンの「天地創造」をコーラスで歌い、中学生の時に初めて買ったレコードは「黒人霊歌（今はゴスペルソング）」を求め、哀愁と力強さを帯びた曲目を愛唱しました。

さてエッセイの本題ですが東大 YMCA では 1959 年に野村良雄氏を顧問とし、音楽美学専攻の先輩等が「グレゴリオ聖歌からバッハまで」を謳い文句に「宗教音楽研究会」を結成、同時にできた「宗教音楽研究会合唱団」（通称 YMCA コーラス）に私は参加しました。コーラスの男声は全員舎生で先輩、同輩、後輩の皆様多数おられたはずですが残念ながらメンバー全員のパートの記憶はなく、現在何とか記憶をたどれるのはバスとしては長島章、島田宗洋、原田明夫、寺尾栄祐、梶村慎吾兄ほかで、テナーとしては村上俊一、川上征、中島伸一兄、関澤他ほぼ 10 名位です。女声陣は音楽大学(武蔵野音大や国立音大)の学生さん、東京女子大、日本女子大、お茶の水女子大の方がほぼ男声と同数参加していました。指揮者は東京女子大学名誉教授・同大学クワイヤ名誉指揮者、明治学院大学クリスマスオラトリオを指揮、室内楽団東京バッハアンサンブル常任指揮者としてバッハ作品の研究と演奏、マックス・ウエーバーの音楽社会学訳解もされた池宮英才先生でした。ピアノ伴奏はピアノ科の学生さん、発声練習は声楽科の学生さんが担当しました。練習曲目は、「キリストは死の縄目に横たわりたもう(Christ lag in todesbanden) BWV4」や、バッハのコラール「主よ　人の望みよ 喜びよ(Wohl mir dass Jesum habe) BWV147」と、ギリシア語による祈りの言葉（「主よ哀れみたまえ」）からなるグレゴリオ聖歌の「キリエ・エレイソン」などでした。カンタータ BWV4 はマルティン・ルター作の復活祭礼拝で歌われるコラールをバッハが編曲したもので通常悲壮な弦楽伴奏で演奏される曲ですが、コラール BWV147 の方はカンタータ“Hertz und Mund und Tat und Leben

(心と口と行いと生き方で)”の終曲で、キリストを信ずる喜びに満ちた曲です。駒場祭の合唱祭への参加に加え、東京女子大学メサイア公演に男声パートの協力出演させていただきました。練習合間には村上氏の尺八演奏披露などもあり、音大の学生さんが卒業演奏で練習中のベートーヴェンのピアノソナタ「アパッショナータ」を礼拝堂のピアノで弾いて下さった時は迫力ある演奏に圧倒されました。私自身は礼拝堂ピアノでバイエルを自己流で練習しましたが、ピアノ科の学生さんに教わればきちんと弾けるようになれたのではないかと後悔しています。

個人的にはシューベルトの歌曲集「美しき水車小屋の娘」「冬の旅」やロシア民謡（ステンカラージンの歌や郵便馬車の御者の歌など原語で）、登山好きなので山の歌、当時の社会を反映し「沖縄を返せ」など、歴史と生活、またロマンあふれる歌に思いを託しました。男子のみの宿舎に女性が来舎し明るい歌声を響かすことができ、クリスマス祝会に分担でお一人を無料招待できたことからコーラスの女性を手分けし招待しました。夏休みには東大野尻寮や同山中寮で合宿があり、合唱団メンバー中には前理事長の原田明夫兄と朋子さんご夫婦のように良縁を結ばれた方も何組かおられました。コーラスを通して仲間とご一緒した楽しいひと時は学生時代の良い思い出であり、おかげ様で今も教会の聖歌隊メンバーとして参加しています。 ところで徳島大学総合科学部の教授として在職時には、映画「バルトの楽園」で紹介された第一次世界大戦中の鳴門の坂東俘虜収容所で、戊申戦争で負けた会津藩士への厳しい処分を経験した会津藩出身の収容所長が、国と家族のために戦い捕虜となったドイツ人兵士を当時として珍しく人道的に扱い地元民との交流を支え楽器の作成に始まる兵士らによる日本初のベートーヴェン第 9 交響曲の演奏を実現させたという伝統ある鳴門市の「2006 年第 25 回第 9 演奏会」に公募の合唱メンバーとして参加しました。

さて最近は世界では大国が大きな顔をのさばらせ、今の日本において物事を内向きにとらえてしまうのは寂しい限りです。東大 YMCA と私達はこの世の動きにどう世に立ち向かってゆくべきでしょうか？

皆様におかれては幅広いお考えをお持ちと思いますが、私たちの教会では会員のうち最も多いのは 80 歳代が 20%超という中、私は教会ではアジアの開発途上国の子供たちへの食と学習の支援事業を担当しています。自分が 60 歳過ぎてからチェロを弾き始めたこともあり、出身普通高校の 40 期後輩の辻本玲さんが 5 年前に N 響首席チェリストに就任したのを機に同窓生の間で彼を応援する会を組織し毎月無料のメルマガを発行し続け、そのほかには福島原発事故被災者を支援する試みも続けています。わずかな働きですが、人の心をつなぐうえでの音楽の素晴らしい力を信じ身近な友や世界の子供たちと手をつないでいきたいと思います。最後に本稿執筆にあたり YMCA コーラスのメンバーにつき、島田宗洋兄、中島伸一兄のご助言をいただきお礼を申し上げます。

東京大学 YMCA の思い出

久保田 信行（1967 年法学部第 2 類卒）

1965 年 4 月―1968 年 3 月



略歴・近況

北海道紋別郡興部町出身。興部高等学校卒業後、東京大学入学。卒業後北海道電力に入社、定年まで勤務。定年後は囲碁に勤しむ。

東大 YMCA に入居、大学生活とその後

1963 年 3 月、北海道の北東、海沿いにある興部という小さな町から大学入学にあわせて上京した。この年、なんの偶然か自分の出身である興部高校から、自分を含め二人も現役で東京大学に合格した。あまりにも珍しいことで、地元新聞に記事が掲載されたほどだった。

とはいえ、東京に親しい人がいるわけではないことには変わらない。当時学費も生活費も全て自分で賄わねばならず、一人で生きていかねばならないと思っていたが、3 年次より入居した東大 YMCA の仲間はそんな自分を温かく迎え入れてくれた。

思い返せば、興部という北海道の片田舎の町から出てきた自分は、教養も文化的経験も自分よりはるかに深い仲間達を前に、多少なりとも気負っていた部分があったかもしれない。しかしながら仲間は自分を「オコッペさん」と呼び、温かく接し、何くれとなく気にかけてくれた。元来人見知りで人付き合いの得意でない自分には、そのことが大変ありがたかった。夕祷の時間を皆と共にもったこと、また当時学生主事でおられた五十嵐正宣さんと一緒にギリシア語を勉強したことなどは今でも思い出に残っている。

法学部を一旦卒業後、学士入学をして第 3 類で一年学んだのち、東大を卒業した。その後は北海道に戻り、定年まで電力会社を勤め上げた。組織に勤める者であれば誰でもそうだと思うが、良いこともあればそうではないこともあった。また 2 年おきの転勤は家族にとって負担だったと思うが、どんな時も常に家族に、とりわけ妻に助けられて定年を迎えることができた。自分なりに故郷に貢献する道を選択したつもりではあったが、東京で学んだ若き日は次第に遠くなっていた。

思わぬ縁

しかしながら人生には予想外のことが起こる。長女の翠が東京藝術大学作曲科を受験することになったのだが、非常に厳しい入学試験で 4 次試験まであり、受験期間が 1 ヶ月近くと長丁場になるという。本人の負担も大きいものではあるが、まずはその間に滞在する場所を探さねばならない。

東京藝術大学といえば上野にキャンパスがあるが、東大 YMCA はそこから徒歩 20 数分である。加えて元入舎者の子弟ということで格安で宿泊することができた。受験が終わるまでの数

週間、YM にご厄介になった。その間、林田縫子さんには大変良くしていただき、翠が大学に入学した後もクリスマス会等に誘ってくれるなど、折々に面倒をみてくれた。

また、林田さんの紹介によって翠は弓町本郷教会の礼拝に何度か参加させていただき、そのご縁からオルガンのレッスンを数度受けた。もとより J・S・バッハの音楽を愛好していた翠は感激し、その後大学でもオルガンの副科レッスンを受けるようになり、就職するまでの長い間結婚式場のオルガニストとして働いた。オルガンへの道筋を開いてくださったという意味でも、林田さんには大変感謝している。

その後、翠が林田さんと久しぶりに再会しようとしていたまさにその前日、林田さんが体調を崩し急逝された。驚きとともに残念なことではあったが、最後まで矍鑠とした、非常に立派な方であった。

そして現在翠の奉職している聖学院大学には、東大 YMCA の OB である清水正之氏がおられた。偶然清水氏が学長を務められている期間に翠が入職した。これもまた驚くべきご縁であり、自分が過ごした若き日々がこのような未来（現在）に繋がっていたとは、本当に人生分からないものである。

富永徹さんのこと

垣内 史堂（1970 年医学部医学科卒）
在舎 1965 年 4 月―1970 年 3 月



略歴・近況
1970 年 東大病院内科研修医
1972 年 東大病院第 2 内科医局員、1972 年三井記念病院内科医員、1973 年東大医科研アレルギー学研究部、1976 年 4 月第 2 内科非常勤医、1978 年東大医科研アレルギー学研究部助手、1981 年 10 月～1983 年 9 月米国 NJH ポスドク、1992 年 4 月～2010 年 3 月東邦大学医学部免疫学講座教授、東邦大学名誉教授、2010～2015 年 3 月客員教授として東邦大学医学部で研究活動、2015 年 4 月松蔭大学看護学部教授・看護学科長、2026 年 3 月退職予定.　写真は 16 年前。

記念誌に寄稿させていただこうと思っていたのだが、締め切りが明日になってやっと手を付けることができた。私は 1968 年 2 月から始まった医学部のインターン制度廃止闘争の渦中にいた。このころのことは東大学生キリスト教青年会 100 周年記念誌に寄稿したが、もう一つ書いておきたいことがある。それが富永徹さんのことである。

私が医学科 M3 で、学年末が迫った 2 月にインターン制度廃止を目指して医学部医学科各学年でクラス決議を積み上げ、医学部自治会で学生ストを決議し、ストに入って連日クラス討論に明け暮れていた。（医学部では本郷に進学してから医学部 1 年生になり M1 というので、M3 というのは大学 5 年生のことである。）長くなるので詳細は省くが、インターン制度廃止を目指したこと自体は正しかったと今でも思っている。いろいろな経過はあったがこの後、ストは全学に広がり、さらに全国の多くの大学に広がった。この全国的な学生運動が抑え込まれた後に、医師国家試験を受験するための前提条件とされた 1 年間のインターン制度は廃止された。

医学科では学生ストが合計 1 年半続いたので、M4 だった上級生は半年遅れで、私たち M3 や M2 の学生はほとんどが 1 年遅れて卒業した。富永さんは文学部哲学科だったので、学生ストが全学に広がる前の年に卒業していた。いろいろな批判はあったが、とにかく学生側と大学側が確認書を交わしてとりあえず“正常化”して、授業が再開された。文学部では医学部とは違うことで火種があったはずだが、詳しいことは思い出せない。私は 1 年遅れて医学部医学科を卒業し、東大病院内科の研修医になっていた。東大病院には内科系に 7 講座があり、それまでは医師国家試験合格の後、各内科系の講座に直接入局していたが、私たちの学年から医師国家試験合格後 2 年間は内科系講座を 3 科を回ってその後にどの医局に入局するか決める制度への変更に、内科系医局と話し合って合意していた。

富永さんは文学部の大学院に進学していたと思うが、会うといつも大学側の紛争対処に筋が通らないと嘆いていた。在舎中も“舎内総会”（という名称だったと思う）では、何が根拠になって変更するのかなど鋭い意見を言う人であった。私が東大病院で内科研修医を始めたあと、

ひょっこり彼が私を訪ねてきたことがあり、東大病院の正面入り口を入って　すぐのところで会ったのだが、岩波の「哲学辞典」と弘文堂の「美学辞典」を私に渡して、「自分はこんな東大で勉強を続けるのも、こんな日本で暮らすのは嫌だから、ドイツに行って勉強する。ついては荷物になるし、これを君にあげる。」と言って去っていった。私はドイツに行ってどこか宛はあるのかと聞いたと思うが、何もないようだったとしか記憶にない。その後は内科研修医としてとても忙しい毎日を過ごしていたので、気になりながらそのままになっていた。ある時、東大Yの誰だったか忘れたが「ヨーロッパ旅行でユースホステルに泊まって、翌朝洗面所で顔を洗って歯を磨いていたところ、隣に富永さんがいた」という話を伝え聞いた。とりあえずは元気にしているのだなと安心したが、何をしているのか、どんな暮らしぶりなのかはわからなかった。

その後数年たって、私は第2科から東大医科研アレルギー学研究部に勉強に行って4年を過ごし、いったん第2内科に戻って内科の診療にあたっていたが、医科研でお世話になった4年先輩から自分の研究室の助手に来ないかと誘っていただき、35歳目前で内科医から免疫学研究者へと転向した。その後2年間の米国留学を経て医科研アレルギー学研究部の助教授にしてもらった。助教授になった頃だと思うが、富永君がひょっこり医科研まで私を訪ねてきてくれた。医科研本館正面前の芝生に座ってしばらく話をした。これももう40年前のことなので記憶がおぼろげだが、ドイツでも定職はないこと、港の荷おろしのような肉体労働もしているということだったと思う。それでも日本の現状を見ると、ドイツで生活し勉強・研究している方が自分にはいいと言っていたことを記憶している。東京でどこにいるのかも聞いたが、八王子の方にいる兄のところにいるということだった。その電話番号を聞いてまた会いましょうということで、その時は帰って行った。

その後は連絡を取ろうと思いつつ、私に余裕がなくてそのままになっていたが、しばらくするとまたドイツへ行った（帰って行った）と誰からともなく伝わってきた。私の方からお兄さんの所に連絡を取ってみればよかったのだが、そのままになってしまった。彼は倉敷工業高校出身で、高卒後しばらく職に就いた後で東大に入り、東大Yに入舎してきた人だったので、私よりも2〜3歳上だったと思う。健在なら84〜5歳くらいになっておられると思う。入舎が私と同期だったように思うが、寄宿舎の委員など一緒に勤めたこともあった。もっと連絡を取っておけばよかったと後悔の念が強い。

名簿にも1968年卒のところにずっと名前しか載っていなくて、つながりのあった人間として記録に残しておきたいと思った次第である。締め切り当日に送稿するという、相変わらずの状態であり、取り留めのない話になってしまったが、彼のことを記しておきたいという私の願いをお許しいただきたい。

東大 YMCA 会館・寄宿舎　建設小史

岩見 宣治（1971 年工学部都市工学科卒）
在舎：1967 年 10 月～1971 年 10 月



学部と修士で 7 年間大学に在籍した後、運輸省（現国土交通省）に就職して、航空と空港の仕事ひと筋に 35 年間勤務。（航空は目覚ましく発展した分野だったので、結構面白く仕事ができました。）4 年前に完全退職して、今は YM ひと筋、管理担当理事を務めています。

1）青年会創立から台町会館へ

「東京帝国大学基督教学生青年会」は、1888 年（明治 21 年）5 月 13 日に大西祝、常松英吉、浜本庫吉、五島清太郎、木村駿吉、兼頭和策、高田畊安、野沢俊二郎、堀田馬三の 9 氏が、西片町の木村熊治氏宅に集まって創立された。その 2 年後の 1890 年（明治 23 年）には、西片町にあった家屋を第一高等中学青年会と共有使用で借受け、4 月 30 日に「聯合青年会館」と名付けて、開館式を行った。これが青年会会館の始まりといえるだろう。

※本小史の記述の多くは「東京大学学生基督教青年会年表」（明治初期から 1952 年まで）に依っており、できるだけ本書の言葉遣いに即して記述した。また、この年表は、当会 OB の荒木亨氏（1957 年文卒）が編纂したもので、以下「荒木年表」と記す。

我が青年会は創立の時から、「寄宿舎生活を共にすることによって、一層我青年会の意義を深からしめん」として、寄宿舎を兼ねた本式の会館を建設しようとする動きがあった。すでに 1889 年（明治 22 年）には、スヰフト・ミラーニ氏の尽力で米国有志の間より募った 1 万円を基礎として、和田垣謙三、井深梶之介、大西祝の三氏の名義で、本郷台町の 370 余坪の土地を会館敷地として購入していたという。その後日清戦役の新機運と共に、建築の計画も進み、1895 年（明治 28 年）年 11 月に、青年会は臨時総会を招集し、会館の建築を為すことに決した。これが初代の本格的な青年会会館となる「台町会館」である。4 月に建築工事に着手し、10 月 17 日には 90 余名の来会者を数えて盛大な開館式を挙行した。木造総 2 階のペンキ塗りの建物で、1 階は食堂、講堂、読書室、応接室、2 階には 10 畳～8 畳の部屋 11 間と祈祷室があり、相当多数の宿泊者を収容できたようである（添付写真を参照）。当時の会館建築には、前述のスヰフト氏や 1 月に来朝した G・M フィッシャー氏に拠るところが大で、お二人は以後長く我青年会のために力を尽されることになる。

※台町会館は、現在の本郷 5 丁目で、「寄宿舎のすぐ下に菊坂の交番がある」との記述もあるので、菊坂を少し上ったところ付近にあったと思われる。

2）千駄木会館から追分会館（旧舎）の建設

この年代は、青年会の歴史のなかでも最も活発な活動が行われた時期で、台町会館はまもなく手狭となり、1903 年（明治 36 年）9 月には、青年会総会で、会館新築のため調査委員 7 名を選んだとの記述がみられる。そして 1905 年（明治 38 年）1 月の臨時総会で、この手狭さのゆえと日露戦争を機として青年会の一大発展を図らんとする遠大な構想などから、会館新築の

計画が提議され満場一致で可決された。

これが現在の会館の前身となる「追分会館」に結実していくことになるが、このように、より大きな本格的な会館建設へと青年会を導く源は台町会館の寄宿舎生活で培った精神運動であったようである。例えば、鈴木博氏の談話（会報 11 号）には「西向きの方には 20 畳敷きの食堂がありその中に囲炉裏がありました。秋から冬にかけて盛んに火が起こされ、駄弁熱弁を弄しました。丁度ゲルマンの思想が森から起こった様に、台町の思想は炉辺から起こったのであります」とあり、片山哲氏（1912 年卒）は同号で、「私は台町末期における炉辺会議が今の社会を動かす原動力になっていたのではないかと思う。回想して興味を覚え、且つ有益なる指針を与えてくれたように思う」と述懐している。また、荒木亨氏も、「この炉辺談話から、鈴木文治、吉野作造、河田茂、藤田逸男、星島二郎など平和と進歩のための学者、闘士、実践者を我青年会から産み出したのである」と記している。これらが今に通じる当会館・寄宿舎の理念といえるだろう。

さて、時を経て 1912 年（明治 45 年）に青年会理事会において、台町会館の敷地を 1 万円以上にて売却し、新会館敷地として駒込追分町 53 番地、宅地 141 坪を金 9 千円にて買い受くることに決定した。台町の敷地は、結局 1 万 5,800 円で売れて、10 月中に退去することになったが、後日談があって、木下順二氏の著書「本郷」によれば、これを買い受けたのは、偶然にも同氏の御父君であり、順二氏はその地で生まれ育ったとのことである。まことに奇遇である。

一方、追分の新敷地は既存家屋移転の困難があり、すぐには新会館建設に至らず、1912 年 11 月の臨時理事会で、駒込千駄木町にある 3 棟の家屋を借り受けて移転することとなった。これが結果的に 3 年半続く「千駄木（仮）会館」である。畳敷きの日本家屋であり、この千駄木会館時代を懐かしむ方々も多い。

新会館の建設計画は、用地取得の難航に加えて、米国の不況と世界大戦のために米国からの寄付が延期になったことなどから、一時頓挫するかに見えたが、1915 年（大正 4 年）に米国青年会より 7 万円の寄付金を送付するとの電報がきて、再び具体化に向けて動き出した。敷地問題も解決できて、新会館は 1916 年（大正 5 年）4 月に完成し、千駄木からの移転が開始された。

建築設計は米国人建築家ウイリアム・メレル・ヴォーリス氏（1905 年に来日、滋賀県近江八幡市を中心にキリスト教の信徒伝道者、建築家、実業家として活動し、各地の西洋建築を設計した）、建築総監督は遠藤新氏（1914 年建築学科卒、米国の建築家フランク・ロイド・ライトに師事、多数のライト様式の建築を遺す。後述の当会館大規模修築工事の設計も担当）であった。この時代には珍しい吹き抜けの大空間を持つ大講堂を中心に、寄宿舎、礼拝堂、食堂、ロビーなどを備えた 3 階建ての本格的な建築であった。追分会館献堂式は 10 月 17 日で奇しくも台町会館と同日で、250 余名の参加を得た）。学生招待会では山室軍平、吉野作造、岡田哲蔵、新渡戸稲造氏らによる講演会があり、延べ 550 名の聴衆を集めた。また隣人招待会ではおとぎ話や映画のほか、ピンポン、ボーリング、ピアノ、オルガンなどを開放して約 600 名が参

加したという。

荒木年表の解説には、「大正 5 年の我青年会は、内は追分に新会館の建築、外は大正デモクラシーの狼火となった吉野作造氏の活躍、同じく鈴木文治氏創立の友愛会の順調なる発展などで、会員の意気たるや軒昂たるものがあったであろう」と記されている。また同解説には、新会館を与えられた喜びの大きさを当時の庶務日誌から引用して、「吾等はここに顕然山上の城なる壮麗にして雄大なる新会館を与えられたる事を万腔の熱禱を以て感謝せずんばあるべからず。事ここに到るまでにすでに数星霜の年月の閲したり。台町の会館を去りて千駄木の仮居時代ありしなり。新会館建設の義はその後幾度か頓挫し、愈々工を起こせるは昨大正 4 年 5 月の事なりしなり」との感慨を述べている。

1923 年（大正 12 年）9 月 1 日に関東大震災が発生。我青年会も建物前面が大きく破損するなど相当の損傷を受けた。舎生一同は一高校庭に逃れて事無きを得たが、建物は警察署より玄関とホールの使用が禁止され、また都内の食糧事情の悪さもあって舎生は一時帰郷した。建物の修築工事を急ぎ、1926 年（大正 15 年・昭和元年）5 月に完成、新会館開館式を挙行の運びとなった。大震災後の混乱期にあって、建築計画や資金の調達には相当の苦労があったことと思われる。

完成した新会館は前述の木下順二氏の「本郷」に詳しく、生き生きと書かれているので、長文ながら以下に引用させていただく。

『東京帝国大学学生基督教青年会というのは、本郷通りの電車道に面した三階半の洋館であった。半というのは地階が半分地上にせりあがっていて、当初は室内運動場だったらしいが、私がはいった頃はそこは貸事務所。その上が一階ということになっていて社交室と呼ばれる絨毯敷きのホール、その上の二階が礼拝堂、その上の三階は客間と称して OB が上京して来て泊まる部屋が四つ並んでいたが、私は卒業後この客間に非合法に住みついて、学生時代から通算すると蜿蜒十七年間蟠踞した。前に書いた天文学者の畑中武夫が住んだのもこの客間であり、亡友森有正との忘れがたい隣り同士の交友六年間を、彼がフランスへ去るまで送ったのもこの客間においてであった。寄宿舎はその裏手にくっついていてこれも三階建て。こっちから向こうへ、つまり東から西へ、向かって走る薄暗い長い廊下の両側に、それぞれ七つか八つの洋間の個室がある。だからそれらの部屋は截然と南向きと北向きに分かれていたわけだが、それぞれの階を一階村、二階村、三階村と称して、三村合わせると五十に近い部屋数だったと思われるうえに、二階廊下突き当りの食堂を通り抜けた更に裏には“二舎”と呼ばれる畳敷きの部屋がいくつかあったのだから、“十字軍”が全国の高等学校へ舎生募集に出かけたのも無理はない。一階廊下の突き当りのへんが風呂場、三階廊下の突き当りはヴェランダで、ここは私の生まれた台町の家から真北に直線距離でたったの七百メートルと少々。（中略）大震災後の新築に近い改築の設計者は、帝国ホテルや自由学園を建てたフランク・ライトのお弟子さんであるこの YMCA の OB、故遠藤新さんで、あれがライト式の特徴なのだろうか、社交室の低い天井、全体として安定感のある独特な水平様式は、改築前の帝国ホテルのあのロビーに共通する感じを

持っていた。』

※追分会館（旧舎）の写真と遠藤新氏が描いた建築平面図を添付しているので参照されたい。

また、木下順二氏はこの会館（旧舎）で過ごした日々を次のように語っている。

『各階の別称、一、二、三階村のそれぞれが一日に一度集まって祈禱会をやる。（中略）その祈禱会後の雑談や、冬の夜には社交室の、あのクリスマスで舞台になったフロアで石炭ストーヴを囲んでがやがやといつまでも、というそういう共同生活の中で、若いなりにほかでは持てない人間関係の、また思考のひろがりを、そして快適な毎日を、東大 YMCA は私たちに与えてくれたと思う。三十年代の後半において、そこは当時なりの“自由主義的”雰囲気を、快い調和の上にまだ維持している小世界だった。』

3）戦前・戦後から新会館・寄宿舎（新舎）の建設へ

先の第二次大戦の前後における寄宿舎の運営は、国家権力の横暴に始まって、徴兵、空襲と火災の恐怖、6-7 名までに減少した在舎生、極端な食糧難など困難を極めたに違いない。そんな中でも東大 YMCA は、隣地まで迫った焼夷弾の炎がバケツリレーで寸前に消し止められたこと、終戦前後の昭和 19 年も 20 年も 21 年も、たゆまずクリスマス礼拝を守り通したことなどが語り継がれている。また、高井康雄先生（1947 年農卒）が 1959 年会報 42 号に「終戦前後の寄宿舎生活」の寄稿がある。舎は食糧難で舎生有志がしばしば八日市場や津田沼、川越までにも買い出しに出かけたことなどの苦労話の他に、『当時寄宿舎には自宅を進駐軍に接収された大塚久雄先生がおられ、身近で社会科学の教えを受けたこと、木下順二氏と森有正氏らと共に過ごせたこと、あるいは夜を徹した舎友達との「だべり会」などがあって、誠にパラダイスの時代であった』と語っておられる。貧しい生活のなかで、舎生が心の豊かさを持ち続けていたことは驚きであり、救いである。

戦時中の建物の傷みも甚だしかったようで、1950 年には、同盟学 Y 寄宿舎修理補助金から 60 万円、あちらこちらと先輩に頼み歩いて募金計 85 万円を得て、屋根、雨漏り、外壁、設備などの大修理を行ったが、さらに費用が嵩んで 60 万円の負債が生じたという。

さて旧舎は、建築後 40 年余を経て、さらに老朽化が進み、各所に建付けの歪み、廊下の軋み、内装の剥がれなどが生じて応急対策も限界となり、1969 年頃から寄宿舎の再建問題が議論され始めた。何よりも消防署より数度にわたって危険建物の指摘を受けるようになったこともあり、1971 年 6 月の理事会において、会館の再建をなすことを決定し、「会館再建準備委員会」が設置された。確かに木造 4 階建てで、多くの人が各室で石油ストーブを使っているのだから、危険極まりないという不安を感じていた。火事を出さずに無事建替えにこぎ着けたのは誠に幸いであった。

その後の再建への動きは、誠に迅速かつ機動的であった。堀豊彦理事長の穏やかで熱いリーダーシップのもとで、再建準備委員会の委員長に植田武彦氏（1924 年卒）、副委員長に山崎幸一郎氏（1924 年卒）を選出し、岩井要氏（1954 年卒）に建築設計担当を依頼して、執行体制を整えた。OB 会員は、堀豊彦理事長の世代（1924 年前後卒）である「朴羅会」、馬場進専

務理事の世代（1930 年前後卒）の「エントツ会」の方々を中心に、総務、財務、建築、募金・契約の各小委員会を構成した。舎生も学生主事の榊裕之兄と月本昭男兄が中心となり、「舎内再建準備委員会」を発足して、全体の動きを共有しながら、舎内議論と再建への取り組みを強化した。「YM の再建」という目標を持った運動体の強さともいうべきか、今思い起こしても OB と舎生の情熱と一体感が最も高まった時代であったと言えるだろう。

再建案は、①現在の敷地を売却して他に移転する案、②現敷地の一部を売却して残地に新築する案、③現敷地を利用して他施設と合築する案の 3 案を中心に検討された。移転案では、郊外の西船橋の国有地払い下げ用地や近場では文京区白山の売地などが候補に上り、舎生も一緒に現地調査に出かけたが、通学距離、敷地の広さ、価格などの一長一短があり成案には至らず、また現敷地の一部売却案は敷地形状の関係などで困難との結論となった。

残るは合築案で、まず同類のプロジェクトを手掛けていた住宅公団に相談に行ったが、日照権問題の解決などが当方の責務になるなどの不利があって断念した。一方、民間マンション業者の動きは活発で、複数の提案が持ち込まれた。合築案では YM がマンションの一画を区分所有する形となるため、今後の建替えや大規模修繕に一定の制約を受けざるをえないことや将来的には財産価値が目減りすることなどを懸念する意見も出されたが、現在地に引き続き会館を持てる意義も大きく、十分な床面積を持ち、当面の資金手当てや恒久的な収入源を確保できるとの見方で、再建案の方向性が定まった。最終的には、YM の土地を核として近隣地を買収のうえ大規模マンションを建設するという東海興業㈱の提案を採用することとなり、現在の姿の再建計画が決定された。

もう一つの大課題は会員からの募金による資金の調達である。「募金委員会」が設置され、募金実行委員長には鈴木厚氏（1927 年卒）、舎生委員は吉岡直人氏（1972 年卒）が就任した。1972 年 12 月には「東京大学学生基督教青年会再建募金募集趣意書」が作成され、各世代を網羅する会員 140 名が発起人に名を連ねるとともに、『①学生生活のよりよき充足、②学生相互の親睦友好、③学生会員と先輩会員の交流と先輩会員の定例的会合、⑤東大に於ける外国人留学生の寄宿並びに学生会員との友好などの、今までは十分果たすことができなかった諸種の用途にも十分応える事ができる場を提供する場所として、新しい会館、寄宿舎の再建を希求しているところです』と再建の目標が記されている。世代ごとの同窓会などを通じて全会員に呼びかけ、さらに舎生が遠く関西まで赴いて先輩を訪問するなど縦横断の募金活動が展開された。結果的には、会員 350 名と法人 23 件から、募金総額：2,660 万円に達する多大なご協力をいただくことができた。

1973 年 3 月、いよいよ旧舎の解体撤去、新舎の着工が迫ってきたところで、「懐旧舎記念会」が開かれた。片山哲氏や星島二郎氏などの先輩方、礼拝堂を演劇の練習拠点にして来た山本安英さんら「ぶどうの会」の方々、舎生、家族など 100 余名が参加して、さらには、舎生・先輩が足しげく通った「のんき」のおでんや、「南米」のコーヒーなどの屋台も出してもらって、旧舎との別れを惜しんだ。

そして次なる課題は、工事期間中の YM の移転先である。舎生は周辺のアパートを探して分宿し、集会・連絡用に部屋を借りた。事務局の仮事務所は新宿区戸塚の日本キリスト教会館に間借りし、理事会、総会も同会館で行われた。また、工事敷地内にプレハブの倉庫を建ててもらい、図書、什器、備品類を収納してもらったので、散逸することなく引き継ぐことができた。舎生の生活や法人の運営は何をするにも不便で、様々なご苦労があったものと推察される。

新舎の設計は岩井要氏と同氏主宰の「真建築設計事務所」に請け負っていただき、東海興業との折衝にもあたっていただいた。岩井氏の指導を受けながら舎生も設計協議に参画し、他大学 YMCA 寮の動向を調べ、あるいはルーテル神学大学の学生寮の見学に行くなどして、望ましい寄宿舎像を議論し提案した。

YM 所有の敷地は 285 坪（約 940 ㎡）あり、当時の資産価値は 1 億 4,250 万円という。大先輩たちは誠に大きな財産を我々に残してくれたものである。これと等価交換する形で、マンション・ファミール本郷の 1 階から 4 階までの一画（延床面積：約 1500 ㎡）を区分所有することとなった。26 室の舎生個室のほか、2 階に礼拝堂、事務室、OB 談話室、食堂、3 階に集会・娯楽室、舎生談話室、4 階に図書室、和洋の客室などが配置され、豊かなスペースとセントラル方式の暖房設備などを備えた快適な会館・寄宿舎が完成した。また岩井要氏の設計では、礼拝堂には前後に段差をつけて旧舎社交室の雰囲気を残し、旧舎で使った六角テーブルや椅子などを修理して今日に伝える工夫がなされている。

建設工事は石油ショックによる建設資材の不足などの困難に見舞われつつも、OB 諸氏の種々のご尽力により、1975 年 3 月 15 日に新会館が完成した。早速旧舎生 7 名が入居したが、中には気の毒ながら 3 月末までの体験宿泊にならざるを得ない舎生もいたので、新旧両舎に入居したのは、清水正之、篠原正雄、亀井俊之兄の 3 名のみであった。4 月 26 日には佐伯倹牧師の司式・説教により「新会館竣工記念式」が行われ、120 名の参加を得て盛大に祝賀会が開催された。

岩井要氏と再建を担われた先輩諸氏が東海興業㈱と粘り強く折衝していただいたおかげで、新舎建物の他に、マンションの一戸と駐車場 3 台分及び特別寄付金 3,000 万円を受け取れることとなりこれらの資産がその後の当会の健全な運営に大いに寄与することとなった。

4）これからの会館・寄宿舎に向けて

当会館・寄宿舎の今後の計画としては、合築・区分所有としたマンション全体の建替えは容易ではなく、一方建築構造的には当分居住可能との見込みが付いたので、2025 年度から、建物の老朽化・不具合箇所、女子舎生用の設備不足、セキュリティ対策等緊急度の高い施設を中心に、大規模修繕に取り掛かることとした。

会館・寄宿舎は、東大 YMCA の存立基盤をなす必要不可欠な施設である。現建物の維持保全と機能の向上に努めて、これからも毎年多くの舎生を迎え、巣立っていくことに寄与できれば幸いである。

気になる“先輩”

篠原 正雄（1971 年理学部天文学科卒 D）
在舎　旧舎　1969 年 12 月―1971 年 3 月
　　新舎　1975 年 4 月―1977 年 3 月



新島学園高等学校卒
東大理学部天文学科卒
1985~2019 駒澤大学教員
2020.5~26.5 東大 Y 常務理事

1969 年 12 月、私は東大 YMCA 寄宿舎に入舎した。現会館の前にあった「旧舎」である。関東大震災後の改修から 50 年近く経った木造の舎。先輩たちが歩いた廊下。木下順二先輩につながる山本安英の会の練習風景。森有正先輩が演奏したというオルガン。

舎でリーダーシップを発揮して議論する面々の中に、三股央兄がいた。東大 YMCA の先輩の一人と思ったのだが、実はちがっていた。当時の舎には、本木セツルメント、目黒 YMCA 等、舎外の活動に関わる舎生が多くいた。三股兄は都市 YMCA のメンバーで、目黒 Y で活動している舎生とつながっていた。

私は目黒 Y などの活動に関わらなかったけれど、舎の再建で旧舎を出て、下宿したころから、三股兄が主事を務めた横浜 YMCA の予備校で非常勤の講師をさせていただいた。

新舎が完成し 2 年ほど暮らした後もしばらくお世話になった。1983 年に私は新舎の礼拝堂で結婚式をあげた。その後、三股兄は私たち夫妻をご自宅に招いてくださった。懐かしい思い出である。18 年後、私の妻が癌で召されたとき、思い出の礼拝堂に集まり私を慰めてくださった若手会のメンバーの中に、三股兄もおられた。若手会が本当の若手の会であったころから、ほぼ毎回三股兄は出席されていた。若手会の当然の主要メンバーである。

2004 年 3 月 20 日、横浜の中華街で開かれた若手会には、大口理事長と事務員の加藤さんも参加された。記憶はあいまいだが、三股兄の送別の会でもあったと思う。2013 年、町田に向かう電車で三股氏とばったり出逢い、話したいこともあるのでそのうち町田あたりでと声をかけられた。しかし、翌年正月に、69 年の生涯を閉じた知らせを受けた。教会で行われた葬儀には懐かしい面々の顔があった。

私は、三股兄についてふさわしい書き手ではない。三股兄と論じ合う人々の中に私はいなかった。兄の言動も活動もほとんど知らない。再建のさなか、新しい舎の活動の在り方をめぐり、吉岡兄と共に三股兄を訪ねたことがある。三股兄を誘う吉岡兄の脇で、私が消極的な物言いをしたことが、ブレーキとなってしまったのではないかと思うことがある。物言いに気を付けていれば、兄を迎えて一層アクティブな舎になっていたのかもしれないと思うこともある。

おそらく、三股兄以外にもいろいろな時代に、会員ではないがその時代の舎生に強い影響を与えた人は幾人もいたことだろう。きっと今も。そして、これからも。

旧舎から新舎へ

清水正之（1971 年文学部倫理学科卒）

在舎　旧舎　1969 年 12 月―1971 年 3 月
　　新舎　1975 年 4 月―1979 年 3 月



三重大学、東京理科大学、聖学院大学教授をへて、聖学院大学学長、聖学院理事長を務める。聖学院大学名誉学長・名誉教授. 日本倫理学会名誉会員

偶然から、旧舎と新舎の双方で、東大 YMCA の生活を体験することができた者として、ささやかな思い出を記しておきたい。正確な記憶はないが、たしか旧舎の最終的な選考の一つ前に入舎を認められたのではなかっただろうか。入舎は 1969 年の 12 月、本郷進学と同じ時期であった。駒場のストライキとその解除の余波で、変則的にその年の 4 月本郷進学が全学的に 12 月になったからであった。当時、特に文学部はなお闘争の余波でほとんど授業はなく、余塵は YM の生活にもいろんな形で影響はあった。しかし、そもそも信仰と生活の場である舎はそれとは別の空間であった。あれこれと思い出は尽きないが、当時の心象風景に関わることでは、いつも身近に音楽があったことだろうか。聖歌の和音はいまでも耳に残る。祈禱室から毎晩のように響いてくる故若原兄の弾くチャイコフスキー、新舎では、片山兄のピアノ演奏、様々なジャンルの音楽に通じていた半田兄から教えられたジャニス・イアン、その青春の繊細な感性がそのまま空気になり音になったかのような曲と歌声、諸兄を通してその後の私の糧となった楽曲は多い。道路の向こう側に喫茶店「南米」があった。何人かの舎生が常連であったが、世間で有名になる前の小椋佳のデビューレコードを聴いたことも懐かしい思い出である。「・・青春の夢にあこがれもせずに　青春の光を追いかけもせずに　流れていった時よ　果てしない海へ　消えた僕の　若い力　呼んでみたい・・」（「しおさいの詩」）、どこか当時の心象風景に合っていたのかもしれない。

旧舎は 4 層の木造建てで、その三層に 30 数人がともに暮らす多人数であったので、たとえば同時期に文学部だけでも 6 人ほどが在舎していた。もちろん医学部、法学部、農学部、薬学部、経済学部，教養とそれぞれ複数の舎生がおり、多彩であったことは現在とはやや異なるところである。食事時の雑談、夕禱での講話と議論、それぞれに個性がやどっており、豊かな舎生活であった。基本的にみな理性的であったが、理論家、社会派、あるいは神秘家と個性の現れは多彩であった。その交わりの中で、わたしはひとつとして嫌な思い出はない。少し遅れた入舎であり、改築時については、わたしは端から見ているだけであった。舎生また OB の方たちの知識・経験をふまえた活躍・献身は、印象深い。在学中に改築をむかえたメンバーは、新舎の完成まで根津やこの近辺に暮らし、月一度程度集まって、近況の報告やおしゃべりを楽しんだ。

巡り合わせで私は、篠原正雄兄、亀井俊之兄とともに、院生として新舎の生活を経験するこ

とができた。今から思えば、旧舎の伝統を新舎にという意識は強かったのかもしれない。新舎の後輩から、こんな発言をしていたと聞く度、当方の記憶になく、恥ずかしく思っている。どうかご容赦を。

1966 年に遠藤周作氏の『沈黙』が発表された。重いテーマではあったが、私には、キリスト教は「お仕着せの洋服」ではなく、「選択」したものであるため、必ずしもそのテーマに共感するわけでもなかったが、読後感を会報に書いたことを覚えている。むしろ特に旧舎時代、深く感じ取っていたのは、先輩としてかつて在舎された森有正氏のことである。祈禱室の置かれたオルガンが、森氏の弾いていたオルガンであるなど、私には意味をもった。森有正氏は、今の若い人にはなじみがないであろうが、東大の仏文の助教授であったとき職を辞し、渡仏し以後パリの東洋語学校で教職につき思索を続けた思想家・哲学者である。キリスト教信仰の近代日本における現実の様態、知的意味を思想史研究の一つの課題と考えていた私には、とても重い存在であった。森氏は、様々な仕事を残しているが、日本語の「経験」ということはその一つである。森氏は、経験は日本語を離れては存在しない。欧米語が「A is B」と発話の主体が誰であっても公共的は命題となるに対して、「A は B でございます」「A は B だ」「A は B でございましょう」等々、発話者甲と乙との関係をむしろ表視することになり、甲と乙との関係が、発話のなかに紛れ込む。森氏はそれを「二項方式」と呼んで日本語が客観的な発話とならず、上下の人間関係が重なることを敏感に感じ批判している。その背後に日本の「家の重み」、あるいは「革命の不在」を指摘してもいる（『経験と思想』）。森氏は、西洋的価値に拝跪したわけではない。当時から共同体論者として批判されてきた和辻哲郎の見解を、正面から受け止めているし、晩年は帰国の機会に、北大でかれが「原爆的」問題を提起したとみる本居宣長を院生と読んでいたという。人間が孤独でありながら、共同性を営まざるをえないそのあり方に正面から取り組んだ思想家といえるだろう。戦後の著作『ドストエーフスキー覚書』（1947 年）のあとがきに「東京・本郷の客舎にて」とあり、67 年の改版あとがきに「イデオロギーのうずまく敗戦後の一種異様な精神情況のなかで模索していた私」という一節がある。ちなみに、旧舎は戦後の文化的拠点という性格を持っていた。木下順二氏の作品を上演しつづけた山本安江さんが稽古場として利用していたこともある。

たとえば他者とは何か、というような容易に答えの出ない問題に根気よく関わり続けてきた流れの一つはキリスト教である。同時期に共に暮らした諸兄が、いつまでも初心を忘れることなくそれぞれの課題に向き合っていることに、いつも眼を開かれる思いを持つ。

私たち戦後の団塊の世代までには、近代日本の悲惨さと陰惨さの影が残る。森氏がドストエーフスキー論等で追究したように、人間が罪人である以上、悲惨と陰惨は今日でも形を変えながらあるだろう。しかし、若い世代の人たちが、足をすくわれる事なく、明朗な言葉と行為で未来を拓こうとしている姿を見る度に「希望」を感ずる。舎が今後ともキリスト教的意味での「希望」を懐くことのできる場であって欲しいと切に願うものである。

東大 YMCA 寮から戴いたもの

半田 武比古（1977 年工学部航空学科卒）
1975 年 4 月―1979 年 3 月



略歴・近況：航空会社の技術屋をかれこれ46年余働きもうすぐ引退の予定。学部修士を併せ50年余を「航空」という特殊な分野に捧げたのが、私的自負。終の棲家を信州安曇野に定め、田舎暮らしを満喫。さてこれから何をするか？

會報 124 号（2005 年 12 月発行）に故原田明夫先輩（元理事長）が寄稿された同じ題名の随想を改めて読ませていただき、「この寮に入舎しなかったら今の私はなかったろうと思う」との謙虚な言葉に同感し大いに触発されたので、せめて同じモチーフで徒然に書き記そうと思う。

原田先輩の寄稿、全体を通して大変興味深い内容ですが、ここでは大変恐縮ではあるが抜粋を付けさせていただく。（縦書きを横書きに変換した関係で漢数字を変更）

（原田明夫氏寄稿:會報第 124 号より抜粋）

東大 YMCA 寮から戴いたもの（1963 年法　原田明夫）

私は、約半世紀前の 1958 年春に兵庫県から上京して東大に入学した翌年の暮れに東大学生基督教青年会寮に入舎して、1963 年春に卒業するまで約三年余りの間、かの懐かしい旧家で生活しました。人生は偶然の要素で進む途が変りうることは、誰しも経験することだと思いますが、私にとっては、この寮に入舎しなかったら今の私はなかったろうと思うことがいくつもあります。

一つは、寮生の仲間、先輩、後輩の多くといまだに続く交友関係です。今から思うと何を語り合ったか覚えてはいませんが、日頃の生活の合間に、誰彼となく部屋にたむろして夜を徹し口角泡を飛ばして人生のあれこれを論じたことがどれくらいあったでしょうか。キリスト教信仰の問題は、人により様々なものがあり、もとより一筋縄で論ずるような方向には行きませんが、舎生のほとんどの者が、それぞれに語るべき仲間を得て、すべてのことに真剣になって向かい合う姿勢を共有することができたことは間違いないでしょう。この間に自然に得たものの考え方が、あの顔この顔を思い起こしつつ、その後のあらゆる機会に身を処する原点となって私の支えになってくれたような気がします。

もう一つは、聖者の教えを縦の線とし、社会に対する横の関係ではリベラルにして民主的な思想を大切にするこの寮が歴史的に育んできた人の生き方です。私は、この夏のある日、以前から一度は行きたいと思っていた宮城県古川市にある「吉野作造記念館」を訪れました。吉野作造先生は、「大正デモクラシーの旗手」と言われ、近代国家としての幕開けとなった明治と動乱の昭和との間でしばしデモクラシーの空気が漂った時代にユートピ

アへの模索を試み、よりよき社会をつくる社会事業家としての活動をし、1917（大正 6）年から 1923（同 12）年までの間、当会の前身である東京帝国大学学生基督教青年会の理事長を務められました。一貫して流れる先生の思潮は、社会の中で悩み苦しむ弱者に対する視点を常に忘れなかったことではないでしょうか。先生が好んで揮された「忠想」という言葉は、「まごころのこもった思いやり」という意味だそうですが、世界を知り、日本の将来を憂い、生涯はげしい知的戦いを続けた先生の心根を感じることができます。具体的な現れ方は人によって異なると思いますが、この寮に集った多くの方々の心の底にある共通のものであると理解できると思うのです。

最後に、宗教音楽との出会いを忘れることが出来ません。この寮に入舎してすぐ宗教音楽研究会合唱団に属しました。この研究会は、バッハ以前の音楽を勉強するというややこしい研究会で、当時美学とか教育学を専攻していた大秀才の先輩らが始めたもので、舎外からも趣旨に賛同して参加されていた学生がいたほか、女声は音楽大学から美声の持ち主が加わってくれており、東京女子大学の音楽主任だった若き日の池宮英才先生が指導に来てくれて発声の基礎から熱心に教えて頂きました。難しい理屈は結局よく分かりませんでしたが、今でもそのころ歌ったいくつかの宗教曲の一節がふと口をついて出てきたりして懐かしく思います。池宮先生の勧めで、仲間と東京女子大のチャペル・コンサートに参加したりしているうちに、メサイアに辿り着いたのです。以後、学生時代から最近まで、東京に在住する間は昨年第 50 回を数えたメサイア演奏会にボランタリ男声として参加し、コーラルコンサートやオルガン演奏会に訪れるなど、昨年 6 月に 40 年間勤めた法務・検察の職を退くまで、私の人生に貴重な潤いを頂いて参りました。

（引用終わり）

（注）以下メサイアにまつわる感動的なイベントの話が続き、最後に、メサイアの歌の一節から起こして現代社会の多くの問題と精神的な閉塞感を憂い、多様性を尊重しつつ共生を図る理念と哲学の復権が必要であり、知性を働かせる能力を育むべきと、教育論で結んでいます。

（ここからは、半田なりのトリビュートです）

私は新舎一期生として入舎した四名のうちの一人です。1975 年春、同時期に入舎したのは、佐藤廣（医：以後旧姓芦川さんで）、宮内啓行（法）、岩崎英二（工）の三兄でしたが、残念ながら芦川さん、宮内兄の二人はすでに帰天され、今となっては昔話に花を咲かせられる同期入舎生は、岩崎兄だけになりました。

芦川さんは確か大学卒業後にもう一度理三に改めて入学された方で私にとっては人生の先輩、舎内では色々とお付き合いいただきましたが、話し方が理知的でちょっと辛口、単純思考な私にとっては違う見方を教えてくれた方でした。芦川さんは敬虔なカソリック信徒であり、「プロテスタントな」私と宗教論争をしたような、しなかったような・・

晴れて医者になられた後は、新宿区四ツ谷にある佐藤内科小児科医院で長年医療の前線で活躍されましたが、2018 年に亡くなられたのが惜しまれます。

宮内兄は、学業の法学部の勉強はそこそこに（と私には見えました）、トロンボーンを吹き、東大オケにのめりこんだ音楽家肌で、当時からプロ並みのいい音を奏でておられました。彼にせがまれて切符を買い、上野の音楽ホールで東大オケの定期演奏会を聴きに行ったことがあり、プロ顔負けのシンフォニーに驚きました。　さて、演奏曲はブラームスだったか、チャイコフスキーの交響曲だったか、今となっては思い出せません。

宮内兄は大学卒業後に日本郵船に入社され企業人としてまたアマチュアの音楽家として活躍されました。彼の結婚も事務の故加藤せつさんに仲を取り持ってもらった口だったような、本当に加藤さん恐るべしです。ただ、働きざかりの 1995 年 10 月、赴任先のイギリスで病に倒れ、若くして亡くなられたのは、本当に残念です。モロッコ帰りで現地の風土病にかかったのではないかと。



当時のクリスマス祝会での一幕。
左から故宮内、岩崎、故佐藤（旧姓芦川）、合田、劉各兄と半田

新舎に入舎した当時は、東大農学部前の向ヶ丘一丁目付近もそれほど開発されてなくて、ピカピカのマンションの一角に住めるとは・・と感激したとともに心して暮らさないといけないなと思ったところです。入舎当時は旧舎からの先輩が六名ほどおられましたので、東大 YMCA 旧舎からの伝統は、先輩諸氏の温かい対応の中受け継いで来た気がします。勿論、専務理事の馬場さんと事務の加藤さんの薫陶よろしきを得て。

私が在舎していた頃は夕祷が守られていましたが、キリスト教といってもいろいろな考え方があること、また食堂での楽しいダベリなど今でも懐かしく思いますが、さて何を話したものかと。私の部屋は 3 階の奥まったところにありましたが、私の部屋でクラシック音楽とコーヒーが楽しめるということで、色々な方が集まってきて、さながら午後の喫茶店だったかもしれません。　ただ、近くの喫茶店、南米さんには勝てません。

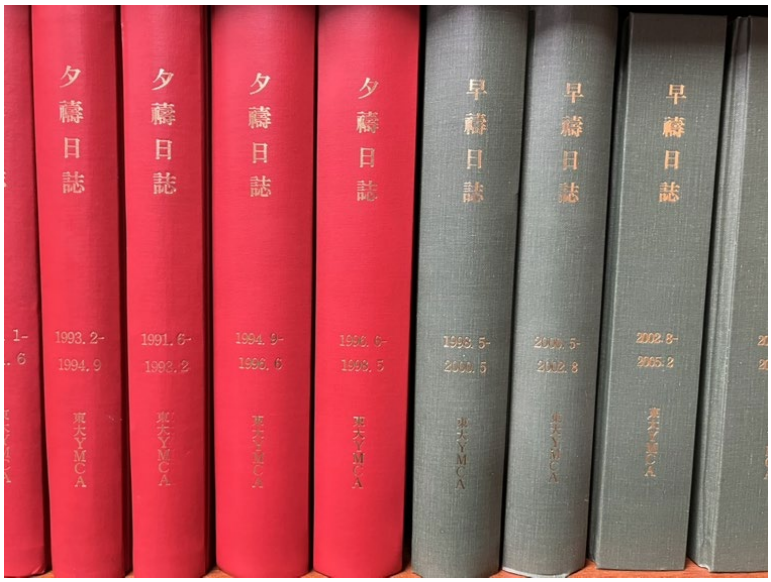
当時、東大 YMCA を運営しておられた、故堀豊彦理事長、故馬場専務理事他錚々たる理事の皆さんには折につけ気軽に声をかけていただき、東大 YMCA の歴史を実感した気がしました。

各方面でご活躍の OB の方からいろいろとお話を聞くことができたことを懐かしく思い出します。特に、大塚久雄さんや木下順二さんの座談会など、今でも鮮明に覚えています。

神学の勉強会では、牧師であり東京女子大学で宗教学の教鞭をとられていた故村上伸教授の勉強会が記憶に残っています。　ディートリッヒ・ボンヘッファーの神学は奥が深く、なかなか深い理解はできませんでしたが、ナチス政権下で真の信仰を守ろうとして逮捕され処刑された彼の生涯は忘れることがありません。　なお、個人的なことで恐縮ですが、家内が東京女子大生で村上先生の弟子だったこともあり、村上先生に私どもの結婚式の司式をしていただいたことも懐かしく思い出します。

（初めにもどって原田大先輩の随想には到底及びませんでしたが、）私にとっての東大 YMCA はキリスト者としての学びもさることながら、仲間や先輩後輩の皆さんとの交流、専門以外の学問（の一端）を垣間見ることができた貴重な四年間だったと思います。

東大 YMCA　トリビア



1997 年 3 月夕祷が早祷（早天祈祷会）に変更された。その理由について会報第 108 号（1997 年 12 月発行）で当時舎生その後学生主事の中村義哉氏が報告されています。曰く 1961 年 10 月に夕祷に変更して以来の大転換。変更の一番のメリットは実験、研究等で夜遅くまで大学にいる理系舎生などが参加できること。デメリットは朝早く起きるのが眠くてつらいこと。出席者が 20%増え、まずは順調。このモチベーションを保っていきたいと結んでいます。
夕祷世代の小生としては、なんで早祷になったのかな、という長年のハテナ？が解けました。

はるかなる東京大学 YMCA

山口 栄一（1977 年理学部物理学科卒）
在舎 1975 年 11 月―1979 年 3 月



略歴　NTT 基礎研究所主幹研究員、IMRA Europe 招聘研究員、21 世紀政策研究所研究主幹、同志社大学大学院教授、ケンブリッジ大学クレアホール客員フェロー、京都大学大学院教授を歴任し、オルバイオ㈱代表取締役、京都大学名誉教授。

東大 Y に巡り合うまで

1970 年 1 月 8 日、福岡ではめずらしい大雪の日の夜明けに肝臓がんを患っていた母が息を引き取った。あわただしい法要で繰り返される法華経の方便品と如来寿量品をついに暗記するまでになったぼくは、四十九日を終えて悲しむ暇もなく高校受験に突入し県立修猷館高校に入学した。

ところが父はほどなく言った。

「福岡を出るばい。心機一転たい」

「どこへ行くと？」とぼくが聞くと

「東京に行こうと思うとる」と父は答えた。

すでに妹の曜子は、子のいなかった東京の叔母の所に養女として出されていた。母に伝わらぬよう、母ががんだと知らされていなかった 9 歳の曜子は、母の突然の死を前にしてダムの決壊のように泣きはじめ泣き続けた。翌日もその翌日も声をあげてずっと泣いた。そしてそのまま訳も分からずに父と兄から引き離されて東京に連れていかれたのだ。

そんな妹にまた会える。曜子に会いたい。ぼくは、もちろん「うん、行こう」と言った。

こうしてぼくは高 1 の夏に都立立川高校の編入試験を受け、2 年半後に卒業してすぐに駒場に通うことになった。父は再婚して赤ん坊が生まれていたから、狭かった社宅のアパートから早く出なければと思っていたぼくはそこで、駒場寮に入ることにした。ところがある日寮に帰ってみると、ぼくの机は荒らされ、ベッドには誰かが反吐を吐いている。

もうここには住めない。ぼくは荻窪に 6 畳のボロアパートを探し当て、そこで塾をしながら一人暮らしを始めた。中央線の高架の斜め下。家賃 18000 円と格安だけれどとてつもなくうるさいばかりか電車内の便所の汚物がひっきりなしに飛んでくる。

いまつくづく思う。母の死後、どうして 5 年ものあいだ、そんな苛烈な状況から逃げ出さなかったのか。そして大学入学後どうしてそんな酷い生活に耐えられたのか。

それは、ぼくが「この世」から放りだされていたからだ。つまり「あの世」を彷徨っていたのだ、と思う。さらにいえば、ぼくは母親に会いたくて黄泉の国の入り口を探していたのだ。黄泉の国はどこにあるのか、法華経にはその答えは書いてない。そこでキリスト教を始めいろんな宗教の門を叩いた。哲学を始めいろんな学問に入門してみた。唯一、物理学にだけ、「あの世」と「この世」の境界が書いてあった。相対性理論だ。こうしてぼくは物理学科に進むことを決めたのだった。

東大Ｙに巡り合って

1975 年、本郷に進学したある秋の日、ぼくは正門付近で 1 枚のポスターを見つけた。東大 YMCA 入舎生求む。月額食事付 32000 円。安い。

何よりもびっくりしたのは、その入舎資格だった。キリスト者もしくはキリスト者たらんとする者。簡潔で美しい。

しかし教会に行ったこともなければ、教会への入り方も知らないぼくに資格があるのか。それでも、キリスト者たらんとすることならできるかもしれない。応募してみよう。

まばゆい輝きを放つできたての東大Ｙの 3 階談話室に集まった入舎希望者は 20 名を超えていた。面接では、いったい何を聞かれるのだろう。おどおどと面接会場に入ってみると、10 人近くの面接官がいた。舎生全員だ。ぼくは被告席に座った。すると篠原正雄さんが優しく問うた。

「将来、どんなことをしたいですか」

ぼくは答えた。

「物理の研究です」それだけだった。

こうしてぼくは、晴れて舎生となることができた。一緒に合格したのはひとり灰本周三くん。同い年の経済学部生だ。灰本くんやそのすぐ後に入舎した文学部東洋史学科の小林辰美くんとは、本当にいつも一緒に過ごした。そして心の中をすべて打ち明けあった。

何よりも忘れられない記憶を掲げておこう。それは、クリスマス祝会でぼくたちが企画したオリジナルの児童劇だ。監督は、小林くん。彼は本屋で「白いりゅう 黒いりゅう」という童話を見つけ出してみごとな脚本を書き上げた。正義の味方の白いりゅうの役は團紀彦くん、悪者の黒いりゅうの役はぼくだ。さらには村の長老役は合田隆史くん、その妻役はその後ぼくの妻になる京子だった。バックミュージックは、小林くんと一緒に良く聞いていたサンタナのアブラクサス。何と今でも黒いりゅうのセリフを覚えている。

「万物は流転するとヘラクレイトスも言っておる」。

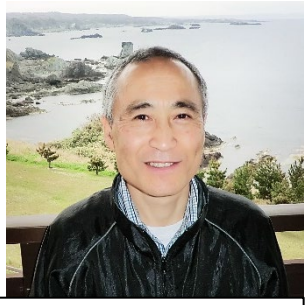
それから 50 年が経つ。篠原さんや清水正之さんは今でもぼくの一番のメンターだし、同い年だった灰本くんや小林くんや合田くんは今でもぼくの心の友だ。

東大Ｙに入らなかったら、ぼくの人生は異なるものになっていただろう。ぼくは今でも「あの世」にいて、彷徨っていたのではないだろうか。きちんとした個室がプライバシーを保ちつつ、しかし同じ釜の飯を食べ夕祷で心の内面を吐き出してみんなに聞いてもらえる。そんな寄宿舎（コレッジ）生活をするうちにぼくはゆっくりと「この世」に戻った。

東大Ｙ。それはぼくの絶望を救ってくれた箱舟だった。10 年後も 50 年後も、できれば 500 年後も静かにここにあって、さまざまな困難を抱え彷徨う東大生たちを優しく受け入れ、そうして柔らかく包みこむ箱舟であり続けてほしい。

ウズラなんですけど

小林 辰美（1977 年文学部東洋史学科卒）
在舎 1976 年 4 月～1979 年 3 月



略歴・近況
出版社勤務を経て、田舎暮らしを求め佐渡島へ移住。現在パン店経営と家庭菜園。

思い出を書きます。

Y 君と街を歩いていたら小鳥屋があって、店先の足元にハトくらいの大きさの地味な鳥が数羽うごめいていました。
「これ、何ていう鳥か知ってるか」と聞くと
「モグラじゃないか」ですって。ウズラなんですけど。

H 君がひとり食堂に座っていたら、もうひとりの H 君が来て生卵をテーブルに置いていきました。すると H 君はニヤニヤしながら足でテーブルゆすり始めました。卵が少―しずつ転がりだしたのに気が付いたもうひとりの H 君はあわてて戻ってきて
「こらーっ」

K さん。夕祷の讃美歌によくハーモニーをつけてました。多才なひとは何でもできる。鶏肉のカレーもおいしかった。

O 君の彼女はバスの一番うしろの席に座るのが好きなんだよ、女王さまになったような気分なんだって。と、もうひとりの O 君が楽しそうに話してました。

Na 君は聖書を文語で読んでる、とびっくりしました。愛読書は森鴎外だと。大きく四つ割にしたキャベツを牛肉と煮込んだ「鴎外スープ」も教えてくれました。彼と一緒にギョーザを作ったことがありました。あとは盛り付けだけ、となったとき、ぼくはどうにも我慢できなくて、一つ食べてしまいました。彼が機嫌をそこねてしまったのは言うまでもありません。申し訳ない。教訓。誰かとギョーザを作るときは、必ず前もって腹ごしらえをしておくこと。

Y 君と八丈島へ行ったことがありました。海が楽しすぎて、泳ぎすぎて、クタクタで、岩にやっと手をかけて登った Y 君、打ち寄せて来た大波にさらわれて後ろに倒れてしまいました。
「死ぬときはこういうふうに死ぬんだなと思った」と言ってました。

M 君が集まりの時、急に窓から差し込んできた光にホコリが浮かんでいました。そのうちの一つを
「空中を漂う微細なネコがヒュルヒュルヒュル」と指先で追っていました。面白いことばかり

言うM君。彼は音楽に詳しくて。僕がたまたま古本屋で買った平凡社の分厚い音楽辞典を譲ってくれないかと頼まれたことがありました。ぼくは断ってしまったのだけれど、彼が持っていたほうが何倍も活用してくれたんだろうなあ。

S さん。台所でインスタントラーメンをゆでながら、吹きこぼれるギリギリのところに火加減を保って見つめていました。秀才中の秀才の静かなひと時でした。

夜更かし君。僕が国からたくさん送られてきた梨を、部屋のドアの外に置いて、「自由に食べてください」と書いておいたら、夜中にゴソゴソ音がしていました。なんだか「人とつながってる」という感じがして、身内が熱くなるようにうれしくなりました。

G 君はギターが上手くて、皆でリクエストしてフォークソングを歌いました。ある時彼が買ったばかりの譜面台を僕は無理をいって譲ってもらいました。
40 年くらい後、再会したときそのことを謝ったら
「えーっ、そんなことあったっけ。よく覚えてるなあ」
僕が記憶力が良いわけではないのです。合宿のとき、G 君は何人かとソファーに座り、その下に寝転がってた Ku 君の背中を、こともあろうに踏んづけて、右手を挙げて、
「悪魔を打ち取ったりー」と嬉しそうに笑っていました。
でも、いちばん笑っていたのは Ku 君のほうだったかもしれない。

Ni 君が何処かの女史たちと、連歌をとりかわしていると聞きました。なるほど、みんなこうして幅広い教養を身に着けているんだな、と妙に感心したことでした。

時々部屋替えがあって、人気があるのは広くて南向きの部屋でした。
だけどY君はひとり北側の部屋を選びました。
「北の空のほうがきれいだから」というのでした。

D 君は荒井由美が好きで、部屋の前を通るといつも聞こえてきました。
コーヒーにミルクが解けていくような時間でした。

Ka 君は夕祷で話す順番がまわってきたとき「たまには専攻のことでも」と、生物学の話をしました。僕も生物をやりたかったのだけれど、その前に化学で挫折して、あきらめていたのでした。70 歳近くなってようやく封印を解いて、化学と生物の勉強を始め、今でも続けています。
何の縛りもなく勉強できるというのは、楽しいものですね。

私にとっての東大 YMCA

柿谷 均（1977 年理学部生物化学科卒）
在舎 1976 年 4 月―1979 年 3 月



Profile　1979 年理学系研究科修士課程修了。東ソー株式会社に入社後、ほぼ一貫してライフサイエンス関連の研究開発に従事。退職後は柿谷技術士事務所を開設して技術コンサルティングや調査活動を継続中。趣味は園芸と歴史。

入舎まで

私は大阪市西成区で生まれ、幼少期を大阪府豊中市で過ごした。その後父親の転勤で広島に移り住むことになったが、転校先の小学校では「おまえ、広島の子じゃなかろう」と仲間外れにされた。以来私は今に至るまでずっと「異邦人」の感覚を持ち続けている。

高校 3 年生になった私は広島から寝台特急列車「あさかぜ」に揺られて単身上京し、東京大学理科Ⅱ類を受験した。幸い現役合格することができたが、文字通り右も左も分からない「おのぼりさん」であり、大学では東京で生まれ育った同級生たちが輝いて見えたものである。

私の家の宗派は代々臨済宗だったが、教育者である父はカトリック系のミッションスクール（広島学院中高等学校）に進学するよう助言し、私はこれに従った。当時の広島学院はキリスト教教育に熱心であったが、私はそれを比較的すんなり受け入れることができた。ついにはキリスト教への入信（洗礼）を強く希望するようになり、これに反対する父と何度も口論した。「おまえを広島学院に入れたのはクリスチャンになってもらうためではない」と繰り返し諭されたものである。それでも食い下がり、父に「分別のつく大学生になるまでその信念が変わらなければ認めてやってもいい」と言わせるところまで押し返した。いま思うと不思議な感じがする。強い信仰心からというより、おそらく反抗期真っただ中にあった私は父（＝権威の権化）に対してレジスタンスを起こしていたのだろう。

私は大学に入った年に恩師である神父からカトリックの洗礼を受けた。しかしそれは多分に恩師に対する深い敬意と、恩師や友人たちとの間で思いを共有することによって得られる安心感に依るものだったように思う。自分の頭で考える力はまだなかった。

YM の門をたたく

駒場での 2 年間を終えた私は、本郷郵便局の裏手にあるパーマ屋の 2 階に引っ越した。下宿部屋の窓を開けると、北の方には周囲を威圧するような高層マンションが見えた。こんなところに住めたらなあ、と漠然と思っていたところ、同じ学科（理学部生物化学科）の先輩である片山兄から学内で声をかけられた。「僕は東大 YMCA の寄宿舎に住んでいるんだけど、一度来てみない？」迷いはなかった。片山兄から入舎選考の手ほどきを受けたのが功を奏したのだ

ろう、1976 年の春、晴れて入舎を許された。

YM での生活

期待に違わず YM での生活は至極快適なものだった。設備や調度品のすべてが新しく、またきちんと整頓されていたのも心地よかった。中高時代に何度か訪れた長束（広島）のイエズス会修練院とイメージが重なるところもあった。しかし違いも大きかった。まず礼拝堂のつくりはカトリックの聖堂と大きく異なり、しばらくは馴染めなかった。次に使う用語の違いである。詳細は省略するが、私は別の言語を学んでいるような気がしたのを覚えている。

私が入舎したとき、カトリック信者は片山兄と私のふたりだけだった。そのころ舎内ではかなり頻繁にカトリックに対する批判（免罪符やマリア崇拝などについて）の言葉が聞かれ、これもまた刺激的だった。この意味で私はまたしても「異邦人」であったが、ここに集まった学生たちはお互いが異邦人同士であることを意識していたのだろう、激しく議論したあと冗談を言い合って終わるという寛容さにあふれていた。こうした関係性こそが私が東大 YMCA で学んだ最も大きなものだったように思う。

このエッセイを書きながら当時を振り返ると、懐かしい場面が次々と脳裏によみがえる。クリスマス祝会での合唱と寸劇、留学生たちと卓球をしながら交わした談話、野辺山や式根島に出かけた夏の修養会、舎生の才能が満ち溢れていた食堂ノート、小泉さんが作ってくれたジャガイモとベーコンの入ったスープ、などなど。

精神の彷徨

社会に出た私はいつしか東大 YMCA で過ごした幸せなときを忘れ、目の前にある課題に立ち向かうことにのみ心を費やすようになった。またキリスト教のマイナス面ばかりが目に付くようになり、カトリックのみならずキリスト教全体に対して懐疑的な見方が自分の中で定着していった。教会に足を運ぶことはなくなり、また東大 YMCA から届く会報は自分とは無縁の遠い存在となった。

私は 50 代半ばでストレスからプチうつになり、一時は仕事の生産性が大幅に低下した。そうした中、自らの精神の安定を保つために読み始めた「ローマ人の物語」（塩野七生著）はこれまでのものの見方を転換するきっかけを与えてくれた。イタリアに住みキリスト教世界にどっぷりつかった生活をしている塩野が「キリスト教嫌い」を公言していることにも大きな興味を覚えた。これをきっかけに、私はカトリックの公式見解と異なるキリスト教理解をしている自分自身を許すことができるようになった。また遥か彼方の存在となった YM の旧舎生たちといつか連絡を取りたいと思うようになった。2024 年末に合田兄らの呼びかけで開催されたウェブ同窓会が発端となり、いまは 50 周年記念誌の作成に関わるという幸運に浴している。私に東大 YMCA の将来を語る資格はないと思うが、どうか新しい時代の要請に応える発展をしていただきたいと願う次第である。

東大 YMCA 新舎という出来事

合田 隆史（1978 年法学部（第一類）卒）
在舎 1975 年 6 月―1977 年 3 月



Profile　1954 年大阪生れ。1978 年文部省入省、2014-22 年仙台近郊の尚絅（しょうけい）学院大学学長。退任後郷里に戻り、現在非常勤で学校法人明治学院理事、聖学院理事など。1978 年 6 月日本基督教団柿ノ木坂教会にて受洗。現在日本バプテスト同盟潮来教会会員。1976-79、2022-現在本会理事、1988-2008 本会評議員。

入舎まで

○大阪の片田舎のクリスチャンホーム 3 代目に生まれ、何とかしてキリスト教の呪縛から逃れようと、高校 3 年まではアリ地獄に落ちたアリの如くもがき続けていたが、ついに力尽きて大学 1 年で受洗。

○それでも心のどこかで、まともなクリスチャンには到底なれないと思っていた自分にとって、「キリスト者たらんとする者」という生き方もあるということに気づかされたのは、ある意味で救いだったのかもしれない。

入舎して間もなくの頃

○東大生の様々な生態に触れ、朝起きて夜寝る、飯時に飯を食うというのが全く普通ではないことを知った（それまでは下宿に一人暮らしだが真っ当な日々だった）。

○キリスト者かどうかにかかわらず、キリスト教に対する疑問についてまともに議論できる仲間を見つけた（尊敬する吉野作造先輩がそうであったように）。

○図書室に、聞いたことはあるが見たことのない神学書がずらりと並んでいて、「ここは宝庫だ」と思った（が、実際には僕には難解過ぎてほとんど読めなかった）。

在舎中のさまざまな契機

○当時、学部学生といえども、特に他学部の学生と話をするときは、みんなそれぞれ少し背伸びをして（東大生特有の見栄も手伝って）、あえて自分の専門分野（と呼ぶにはあまりにも未熟であったにせよ）の知識や発想に基づいて語ろうとしていた。結果としてそれは（夕禱はもとより食堂や廊下の立ち話に至るまで）自分の成長の貴重な糧になった。旧舎残留の先輩からそれ以上に多くを学んだことは言うまでもない。

○いくつかの例を挙げれば、「物事は放っておくとバラバラになる性質がある。したがって、「昨日の次に今日、今日の次に明日」という順に並んでいると思うのは錯覚で、「昨日という記憶を持ち明日があると思い込んでいる今日」があるにすぎず、昨日、今日、明日は実はランダムに並んでいる可能性が高い（先輩天文学者）」→「明日のことを思い煩うな。明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦労は一日にて足れり」（マタイ 6 章）という聖句の自然科学的な意味を悟った。

○「君たちは能天気でうらやましい。大学紛争当時の俺たちは、物事を突き詰めて考え抜いた。極端に言えば、俺は今日なぜたぬきうどんではなくきつねうどんを食うか、についてまで悩んだ（先輩哲学者）。」→頭のいい人は「常識を疑う」のだということを知った（この点で、天文学者と哲学者は一致していた。因みに、大阪人にとって天かすは無料で提供されるべきものであり、いわゆるたぬきうどんは「すうどん」と呼ばれ、きつねうどんとは格が違う。なので、値段が同じであればきつねうどんを食べるのは常識であり、通常この例に関して選択の悩みが生じることはありえない）。
○ジーパンの裾を洗濯挟みで釣って干しているので、腰を上にした方が乾きがいいと助言したら、それでは美しくない、ジーパンを干すときは裾が上でなければならない、と諭された（同期文学部）。→「日常」の行動を規定する原理は、合理主義ではなく美学であるべきだと知った。以後、これを人生の旨としている。
○舎友に勧められて「ベルばら」（池田理代子）を読み始めたら止まらなくなり、徹夜で読破した。そのほか、アクションやビッグコミックなども、誰かが買って食堂などに置いてあったので必ず読んだ。やはり舎友の手ほどきで、クラシック音楽もよく聞いた。それまで少女漫画や成人向け漫画などほとんど読んだことがなく、クラシックは昔の西洋貴族趣味で現代日本人（しかも我々平民）には理解できるはずがないと思っていた。→他者への偏見は自分を不幸にすることを学んだ。

舎を出てから思うこと

旧舎の先輩のお話を伺うにつけ、同じ東大生でも紛争前後でずいぶん変わったと思う。一言で言えば、旧舎の世代は、精神構造として、基本的に「天寵を負へる」エリートであったものが、新舎の世代は、いわばごく普通の大衆になってしまったのではなかろうか（もちろん例外はあるだろうが）。普通の大衆でも東大に行けるようになったせいなのか、社会の東大生に期待するものが変わったからなのか、世代が共有するある種の文化があり、そこに変化があるとすれば、きっとその背景にはそれなりの理由があるに違いない。
新舎竣工後数年の間に在舎した、いわば新舎 1 期生である我々の世代は、全共闘世代にはなじめないが「新人類」にもなり切れない、どちらから見ても「一足違い」の中途半端な世代である。旧舎生から何か「東大 Y 斯く在る可し」などといった説教めいた訓示を受けたわけでもない。しかし、建物は新しくても、新舎という文化を我々は決して白紙から始めえたわけではない。確かに、我々の世代が東大 Y の歴史の中で形成された豊かな土壌によって育てられたことに、疑問をさしはさむ余地はない。
であれば、我々には、我々が受け継いだものにささやかでも何がしかの変異を加えて新しい世代に継承していく責任があるのだろう。それは、自分にとっての「東大 YMCA 新舎という出来事」から半世紀を経た今も変わらない、と思うこの頃である。

寄宿舎の思い出

西　正典（1978 年法学部公法コース卒）

在舎 1975 年 11 月～1978 年 3 月



略歴・近況

1978 年卒業防衛庁（当時）に就職。2015 年事務次官で退職。現在はトランスパシフィックグループという小さなコンサルにいます。48 歳から合気道を始めました。相変わらず防衛省合気道連合会の会長を務めているため毎年 12 月の演武会で「演目第一　会長演武」、これが終わると正月が来ます。

入舎の背景

入舎したのは 50 年前の秋、国鉄のスト権ストのために昭島の実家から駒場に通っていた私は動きが取れない時期でした。根津の駅から千代田線で代々木八幡に出れば駒場の裏口は歩いて 10 分ほど。応募した動機の一つはこれでしょう。確かその年の 5 月祭で本郷にいった時に駒込の六義園に足を延ばしたのですが、ちょうど出来て間もない舎を見つけて「こんな施設があるんだ」と驚いたことを覚えています。駒場の掲示板で舎生募集の張り紙を見て飛びつく下地がありました。

塞翁が馬

高校で学園紛争にかかわったために 2 年浪人しなければ新舎はできていませんでした。相続のトラブルから母が鬱病に苦しんだ時期と私の大学生活との重なり方も変わっていたでしょう、家を出るという考えにも変化があったと思います。偶然のなせる業です。

舎での生活

インターネットはおろか携帯電話すらない幸福な時代。本を読み人と話すことが欠かせない学生生活だったと思います。そして話し込む相手には不自由しない場所でした。そうした中で清水正之兄から教えて頂いた「天皇は日本の政治学ではデーモン、解析することが出来ない存在とする考え方がある」という点は、今に至るまで課題となっています。2011 年の大地震直後のお言葉、ご自身の退位についてのご発言、いずれも憲法が想定していない行為であるに拘わらず一切議論しようとしない憲法学会とマスメディアを見た時に、「デーモン」という観念を思い出したものです。小学校の社会科の授業で憲法 9 条の「戦争放棄」という言葉を聞いた時から感じていた違和感にとって道標となる経験でした。

今になって思うこと

50 年という時間は振り返るとあっという間でした。いろいろな方と巡り合い、いろいろな仕事をしました。偶然のなせる業が重なって今日にいたったように思っています。中国の古典を

勉強したいという希望は両親から「そんなものでは食えない」と反対され大学で専攻することが出来ませんでしたが、中国について分析する仕事は数人の仲間と今でも続けています。歴代王朝の興亡を学んで、この共産党体制にも終わりの時が来ることを恐れ、それがどの様なものになるのだろうと思って見ているだけです。70 歳を過ぎましたが考えていることは舎生当時とあまり変わりはないようです。

シンプル　イズ　ベスト

灰本 周三（1978 年経済学部卒）
在舎 1975 年 12 月～1977 年 2 月



1 年ばかりでしたが東大 YMCA にお世話になりました。

今思い返すと、やはり夜の礼拝が一番印象に残っています、皆勤賞とはいかないものの、真面目に参加していました。夜遊んでいても何か気になって、定時までにそそくさと帰宅していた記憶があります。クリスチャンではない私が何故この夜の礼拝に惹かれたかを振り返ると、その「平易さ」「分かりやすさ」にあった気がします。講話は当然日本語ですし（余談ですが自分の番が回ってくるとテーマを決めるのに悪戦苦闘した苦い経験を思い起こします）、聖書の朗読においても、時代考証的な知識を求められるにせよ、それが無くてもなんとか附いていけました。何よりも日本語ですから。讃美歌においては歌詞がストレートに伝わってくる、すごくわかり易く、多くの美しい曲に溢れていました。こちらも当然日本語です。

略歴・近況
1978 年 日本興業銀行入行
2006 年 みずほグループ執行役員
2007 年 みずほ銀行常務取締役
2010 年 みずほグループ常勤監査役
2011 年 スバル専務執行役員
2016 年 スバル常勤監査役
2020 年 退任
最近は、妻の協力を得ながら家庭菜園を楽しんでいる。

翻ってみますと、私の両親は敬虔な仏教徒（曹洞宗）で、月に一度お坊さんがいらして、家族全員が集い講話と読経を聞くのが日課となっていました。父は東洋哲学の素養があったせいか、経典に通じており、読経もかなりの腕前でした。兄は少しかじっていましたが般若心経が精一杯でした。しかし、何一つ努力していない当時の私にはハードルはとてつもなく高く、仏教は正直理解不能な宗教でしかありませんでした。講話は日本語ですからまだ附いていけますが、読経に至っては漢語とは言え、その音読みや言葉の意味や読経のリズムを理解し習得するにはかなりの知識と教養が求められた気がします。正座がマストであったこととも相まって、私には月に一度のこの儀式は苦痛の時間でした。

YMCA の夜の礼拝に参加しながらこのような事をつらつらと考えていました。プロテスタントは奥の深い教義をいかにシンプルでいかに美しい文章や歌にするかを追求した宗教だと思っています。それが故に、食べ物に溢れ、致命的な疫病も克服され、科学万能主義の現代においても、人々の心を捉え、発展している要因だと整理しています。私としてはその活力の源泉は宗教改革にあると結論し、大学図書館でその関連本を読み漁ったのも懐かしい思い出です。今でも先駆者であるルターを尊敬しています。体を張って信念を貫く姿は読んでいて正に感動物でした

一方、仏教界には何故宗教改革が起こらなかったのかは今でも私にとっては大きな謎です。国風文化を生み出した日本人ですから、日本語のお経を編み出したとしても不思議ではありません。その日本語のお経をリズムよく唱えられれば、万人にとって親しみやすく、今とは違った仏教の世界が開けていたかも知れません。僧侶が知識階級の特権を独占しようとした弊害かも知れませんが、大変に残念な事です。

このような文章を寄稿するとは思ってもいませんでしたが、尊敬する東大 YMCA の同期である山口栄一君から強い要請があり思い立ちました。退舎して早 50 年、かえって昔を思い出す良い機会となりました。当時は建物の新築が成り、多様な人材が集まり、大変活気のある寄宿舎でした。1 年間ばかりではありましたが貴重な経験をさせてもらった事に感謝します。最後になりますが、東大 YMCA のますますの発展をお祈り申し上げます。

以上

東京大学 YMCA の思い出

倉光 泰隆（1978 年法学部私法コース卒）
在舎 1975 年 11 月―1978 年 3 月



Profile　1978 年大学卒業後は東京銀行（現三菱 UFJ 銀行）に入行、銀行退職後は三菱総合研究所に 2021 年まで奉職。現在は悠々自適のはずが、孫達の世話にかり出されている。趣味は、老化防止は指先のこまめな運動からということで始めたクラシックギターと水彩画。

YM 入舎の状況

大学 2 年の秋に居住場所を本郷近辺で探し始めたところ、たまたま掲示板で東大 YMCA の入舎募集のチラシに遭遇。早速現地調査したところ、ぴかぴかの新築マンションではないか、しかも個室。大学にも至近で絶好の物件。カトリック系の中高で公教要理をさぼりまくっていた私にとって、「キリスト者およびキリスト者たらんとする者」という要件はハードルの高いものだったが、入舎希望の作文を提出し面接を受けたところ、幸運にも入舎を認めていただいた。山口兄、西兄、灰本兄、中塚兄が同時期に入舎したと記憶。どういう作文を書いたか、また面接で何を聞かれたか全く忘れてしまったが、母子家庭であったことに配慮をいただいたのではないかと思う。入舎開始を 1975 年 11 月としているが、10 月だったかも知れない。入舎後、個室なのでプライバシーは「かなり」確保されることが再認識された。「かなり」というのは「完全ではない」ということなのだが、時折ふらっと訪れる舎生諸兄により読書や勉学が妨げられることはあっても、コーヒーや酒を酌み交わしながら、学部の枠を超えた色々な話ができたことは、まことに貴重な体験だった。

舎生活のエピソード、思い出

1　日直日誌

内容、筆跡、文体に各自の個性があふれ、読むのが楽しみだった。特に文学部で倫理学専攻の清水兄や哲学専攻の吉田兄は、万年筆のインク痕鮮やかに丁寧な文字で、凝縮したすきのない文章を毎回記されていたと思う。真似を試みたものの、万年筆でいきなり完成系の文章を日直終了後の限られた時間内に書くことは難しく、断念。

2　夕祷

夕祷は日曜にも行なったかどうか記憶が定かではないが、毎夜いろんな方々の考えを聴くことができた。信仰の話あり、学部で研究している課題の話あり、互いの理解と成長に役立ったと考えている。早祷はなかったと記憶。

3　掃除

入浴後は各自で浴槽を掃除したことは覚えているが、トイレ、食堂、礼拝堂などの公共エリアの掃除を誰が行っていたのか、記憶がない。掃除当番があったのか、それとも月に一度の大掃除日があったのか。サボることは無いはずであるが。

4　食事

小泉さんを思い出す。ベーコンと白菜の入ったスープは特にお気に入り。

5　クリスマス

片山兄の指導で、Mozart の“Ave verum corpus”と翌年は Bruckner の”Locus iste”を合唱した。兄からはラテン語の意味も懇切丁寧に解説いただいた。今でも歌を覚えている。

6　留学生

当時台湾からの留学生が 2 人おられた。劉華昌さんと林靖邦さん。私は第 2 外国語が中国語だったが、当時は中国語の教材は豊富ではなく、中国語のリスニングの宿題として、先生が北京側のラジオ放送を録音したテープの文字起こしをする宿題が課されていた。宿題に取り組んでいたところ、林さんが自室から廊下に飛び出し、「スパイの放送だ！」と叫んだ。何事かと思ったが、向かいの部屋の劉さんが出てこられ、「あれは倉光が中国語の勉強をしているだけだ」となだめてくれ、事なきを得た。後になって聞いたのだが、スパイの連絡は短い文章を 2 度ずつ繰り返して伝えていくそうだ。確かに放送内容は「ベトナム人民共和国を断固支持し・・」とか、「シアヌーク殿下を熱烈歓迎し・・」などの短い文章を 2 度ずつ繰り返していた。

7　ニックネーム

柳元　章さん：中国人風に「リュウ　ゲンショウさん」、短く「リュウゲンさん」

片山　啓さん：一言多命（ヒトコトオオシノミコト）。三井兄が命名。

合田　隆史さん：ゴンベさん。日直ノート等にはゴンベマークでサイン。

半田　武比古さん：ハンダヅケタケヒコーキ。片山兄が命名。

西　正典さん：ブル連隊長。のち防衛事務次官になられた。

灰本　周三さん：田村正和。多分自称。

洗礼およびその後

「一言多命」という失礼なニックネームを紹介したが、片山兄にはいろいろお世話になった。おいしい玉露にあずかりながら、理科系の学問の話、芸術の話など興味の尽きない話を伺うことができた。兄に連れられて聖イグナチオ教会に通い始め、大学卒業時の復活徹夜祭の際に洗礼を受ける恵みも与えられた。また、私の結婚式の披露宴の司会も担っていただいた。

その後教会から離れた時期もあったが、現在は自宅の近所のカトリック荻窪教会に所属し、教会委員会などの活動を通して教会の運営のお手伝いをしている。司祭の人材不足のため常駐の司祭はいないが、何とか毎週日曜日のミサは継続できている。皆様一度お越しください。歓迎いたします。

呑喜と南洲屋と…

飯島 康一（1980 年経済学部経済学科卒）
在舎 1978 年 4 月―1980 年 3 月



略歴・近況

1980 年 4 月東亜燃料株式会社（現 ENEOS 株式会社）に入社し、人事・財務部門を主として、国内は東京本社・和歌山工場・川崎工場やニューヨークおよびヒューストン駐在等を経て、2007 年 12 月退職。その後、数社の人事担当役員を務め、2018 年 3 月実務はリタイア。現在は、東燃国際奨学財団理事長として、海外から日本への留学生に対する奨学金事業に携わっています。世田谷区から借り受けている小さな畑仕事と 2 年前から始めた句会への参加を楽しみにしております。3 人の子どもに合計 9 人の孫がおり、憚りながら個人的少子化対策を講じていると自認しております。

呑喜の大鍋

1887 年創業の江戸前おでんの名店呑喜は 2015 年に閉店となった。

私が入寮したのは新舎設立早々の頃であったが、旧地から古参の呑喜は 1 階の片隅に店を構えていた。店内中央には鈍い赤銅色の大鍋が据えられており、穏やかな大人の時間が流れていた。極めて小体な店ではあったが、知る人ぞ知る隠れた名店として人気があり、毎年文藝春秋から発行されていた「東京いい店うまい店」の常連でもあった。南極越冬隊昭和基地にも呑喜のおでんは持ち込まれ、呑喜南極支店(？)として大いに隊員の士気向上に貢献したとも伝えられている。

毎年東大 YMCA のクリスマス祝会は寮生の劇が楽しみの一つではあるが、礼拝堂横でくだんの大鍋からサーブされる、あつあつのおでんもまた贅沢な名物だった。

南洲屋のカウンター

呑喜の客層はぐっと渋く、学生時代にはやや敷居の高い場所であったが、本郷通りを隔ててやや農学部寄り斜め正面に位置していた南洲屋にはよく通ったものだ。なんというお名前だったか樹木希林さん似のおねえさんが快活でいつもお店を明るくしていた。調理場を囲むようにカウンター席が設えてあり、その名の南洲に因むものか泡盛が小さなグラスで供された。学生身分でも懐の痛まない味のよくしみた肉豆腐が絶品で、泡盛との相性が抜群であった。

その当時でも十分に古びた風情の仕舞屋だったその店は跡形もなく消え失せてしまったが、朗らかな談笑の光景が、今も記憶の片隅にある。

電話の呼び出し

携帯電話が普及したのは 1990 年代後半のことであり、当時は各階の階段正面に受話器があり、それを受けた寮生が館内放送で「○○さん、お電話でーす。」と呼び出しをかけていた。そのため確か夜 9 時以降の電話はご遠慮いただくよう家族友人に頼んでいたように思う。

聞き耳を立てていたわけではないが、その来電コールに「〇〇さんには、よくガールフレンドからの電話があるなあ」などと羨んでいた。

入寮面接の熱気

新装間もない寮の設備は快適で美味しい食事も付き、しかも寮費も破格とあって近くの向ヶ丘寮の学生などから羨まれることしきりであった。

当然入寮希望者も相当数あり、面接後の選考会は議論白熱し、結論に至ること数時間に及んだ（コンクラーベの煙は中々上らない）。意見が全員一致するまで議論を尽くすことは伝統であり、夕祷に姿をみせない諸氏もこの時ばかりは顔を揃えた。全員一致という形式は中々興味深いもので、形勢が一方に傾いたかと思ったものの、中入り中断後に一気に逆転したこともありスリリングですらあった。

夕祷の恵み

至近距離にある大学の授業はさぼりがちではあったが、一宿一飯の恩義は深く、夕祷は出来る限り参加していた。ただ学校に通っているだけでは接することのない、文系・理系、学部生・院生交じり合って時間を共にする機会は得難いものであった。Christianity を学ぶことと共に、様々な価値観や人生観を側聞することは、その後の社会人人生にとって素晴らしい経験であった。

サロン・ド・イイジマの夕べ

夕祷が終わると各自自室に戻り勉学に励むことが皆さんの日課であったが、不勉強な学生であった私の部屋は毎夜それからが佳境を迎えた。ベッドや床に腰を落ち着けた諸兄と大いに歓談を楽しみ、深更に至ることが常となり、人知れず「サロン・ド・イイジマ」なる部屋名までいただくことになった。今では然程珍しくはないパイナップルボートの切り方を実家で仕入れて、皆さんにお出しした時の歓声は嬉しいものであった。

晴海埠頭の夜明け

経緯は全く覚えていないが、ある夜明けに寮生数名と晴海埠頭（であったと思う）に赴くことがあった。足をどう調達したかも定かではないが、全面藍色の天空が、西方は藍色を維持する中、東方から徐々に碧色となり更に明度を増していくパノラマショーを、全員が無言でじっと見つめていた時のことを、今でも鮮明に思い起こすことがある。それぞれがどのような感慨をもって暁の空を眺めていたのか、今は知る由もないが。

東大 YMCA 寄宿舎にいた頃

高谷 武良（1982 年法学部卒）
在舎 1977 年 4 月-1981 年



略歴・近況
1957 年 4 月に姫路市で出生
姫路市内の安平・後藤法律事務所（現「はりま法律事務所」）勤務を経て，1999 年 4 月に姫路市内でしらさぎ法律事務所を開業し，現在に至る。

1　私は、1976 年（昭和 51 年）文Ⅰ入学、田舎の進学校からポッと出てきた学生であったので、東京の何もかもが輝いて見えた。

駒場の同じクラス仲間に坂本堤君がいた。彼は卒業後弁護士になり、残念なことだが 1989 年に発生したオウム真理教坂本弁護士一家殺害事件の被害者として名を残すことになった。彼とは一緒に社会問題の読書会をやっていて、そこで学んだことに関連して公害、労働問題、障害者教育などの現場に社会見学と称して一緒に出かけて行っていた。

そんな学習の中で私は韓国の問題に興味を持った。隅谷三喜男教授の岩波新書「韓国の経済」、やはり岩波新書の T・K 生「韓国からの通信」も読書会のテーマだった。前者は朴正熙軍事政権下での韓国の高度成長を、低賃金・対外依存・借款・大企業と中小企業の二重構造といった経済構造の側から分析したものであり、後者はその時代やその後の全斗煥期の軍事政権下での言論統制、知識人や学生・労働者への弾圧、民主化運動の動きを外に伝えるものであった。そして隅谷氏も T・K 生もクリスチャンらしい。そこで、私の興味は次第にキリスト教に移っていった。そして宗教の嫌いな坂本君とは少しずつ疎遠になっていった。

当時私が住んでいたのは井の頭線永福町駅の北側杉並区和泉 3 丁目。近所の日本キリスト教団の教会にドキドキしながら行ってみた。青年部の方々が快く迎えてくれた。次第にわかってきたことだが、当時その教会では牧師と青年部とが対立しているいわゆる「荒れた教会」であった。青年部では韓国の抵抗詩人で当時獄中にいた金芝河の戯曲「金冠のイエス」をクリスマスの劇でやるというのだ。聖書に記されている「荊の冠」ではなく「金冠」というのは本来「苦難のキリスト」のはずがいつのまにか体制や制度に取り込まれてしまい栄光に覆われた「金冠」になってしまってはいないかという批判がこめられている。保守的な高齢の教会員とも交流することができ、「信徒の友」という日本キリスト教団の雑誌を渡され読んでいたが、そこに私の郷里姫路市の牧師たちが執筆された「河合義一：農民の友として」（河合義一伝刊行会　1976 年）（姫路市に隣接する高砂市選出のクリスチャン国会議員の伝記）の紹介がされていた。私は興味を持って春休みに帰省した時に執筆者の中心人物である姫路和光教会の魚住せつ牧師を訪ねてその伝記を借りて読んでみた。魚住せつ牧師の著書「どぶのそばの教会」（教文館）や兵庫県の牧師が応援した種谷牧師裁判の記録「国権と良心」（新教出版社）も借りて読んでみた。種谷牧師裁判（別名：牧会活動事件）は、1970

年の学園闘争中、警察に追われていた高校生 2 人を保護・かくまったとして、日本基督教団尼崎教会の種谷俊一牧師が犯人蔵匿罪に問われた事件であるが、神戸簡易裁判所で種谷牧師の行為は牧会活動であり正当な業務行為として違法性を阻却するとした無罪判決が下された。主任弁護人は東大 YMCA 出身の中平健吉弁護士である。

そのようなクリスチャンの社会正義を求める諸活動を知って私もクリスチャンになりたくなりその休暇中に魚住牧師から洗礼を受けてしまった。聖書もよく読んでおらず、キリスト教の教理も信仰告白も不勉強なのに何故かそんな気持ちになってしまった。東京の「荒れた教会」から離れたかったこともあると思う。しかし、いわゆる改心の体験はなかった。

2　4 月に大学 2 年生になって東京に帰り、学内掲示板で東大 YMCA の舎生募集のポスターを見て、入舎申し込みをした。申込書添付の作文「私とキリスト教」には上記のようなことをうだうだ書いたと思う。多分こんな浅はかな者を入れるかどうかについては大議論があったと思うが、入舎を許されたということは全員了解してくれたということだ。

東大 YMCA 寄宿舎では多種多様な「キリスト者あるいはキリスト者たらんとする者」と出会えた。カソリックの人とは初めての出会いであった。福音派の人とも初めて話をした。キリスト教音楽や美術に興味のある人とも出会えた。同じ屋根の下で共同生活をする以上別タイプの学生とも仲良くやっていかなければならない。夕祷の場は他者の意見を聞く場でもあり、その後議論になるようなこともあったがこれも楽しい思い出だ。私は、内面を深く見つめながらも社会的な奉仕活動を志向するタイプの竹中義春君（医学部保健学科だったが後年長崎大学医学部医学科に合格）から受けた影響が大である。

教会は寄宿舎すぐ近くの日本キリスト教団西片町教会へ行くことになった。上記中平弁護士もいらしたのでたくさんのことを学ぶことができた。しかし、そのうち牧師の任期をめぐり教会が真っ二つに割れて議論をするようになったので、無教会の高橋三郎先生の集会で聖書を学ぶようになった。そして、詩篇 51 篇の講解を通して真の悔い改めと改心に至った。こんな感じで学生時代はキリスト教漬けの日々であった。

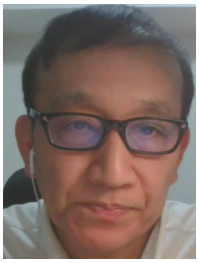
3　現在郷里の姫路で独立開業弁護士として働いている。中平弁護士のような信教の自由や政教分離にかかわる大きな仕事をしたことはないが、キリスト者として恥じることのない弁護士生活を送りたいと願っている。そろそろ 70 歳になるのでそれを機会に弁護士業をリタイアして帰農する予定である。相続した水田で小さな稲作をしていたら村で最後の稲作者となってしまった。

それとともに仕事で忙しい中関西学院大学神学部に通って学んだギリシア語やヘブライ語を思い起こして原典で聖書を学ぶ老後を考えている。

以上

東京大学 YMCA 会報によるつながり－預言など投稿

近藤 信和（1987 年法学部第Ⅱ類卒）
在舎 1985 年 4 月－1987 年 3 月



略歴・近況
大学卒業後、電機メーカー勤務中（法務）。プロテスタント教会、無教会系の集会、南原繁研究会に所属。教会付属の神学校に在学中。

1. 東大 YMCA での出会いや学び、感じたこと

私は大学 3 年 4 年の 2 年間、東大 YMCA で生活し、美味しい食事もいただき、毎日の夕祷や合宿等を経験し、ともに聖書を読み学びお祈りできたこと、私は会計担当と財務理事を経験できたこと、法学部の在舎生二人が（所属教会は異なっても）卒業前のクリスマスに受洗に至ったこと等を感謝しています。夕祷で私が当番の時は信仰書と聖書を読んでいましたがウィリアム・バークレーや内村鑑三の『一日一生』等を使うとよかったです。

2. 会報によるつながり

年に 2 回送られてくる会報により、在舎生や卒業生の様子を少しずつでも知ることができ、祈ることもでき、感謝をしています。

私も過去に、勤め先の派遣でイギリスへ語学留学できたこと等を会報に投稿でき、良い記念となっています。

数年前には、南原繁研究会等に所属していることを会報に投稿し、東大 YMCA の知り合いに南原繁研究会の講演会の案内等を送ったりしています。

東大 YMCA 会報 2025 年 12 月号へ掲載をお願いしたものもあります。1)預言、2)イスラエル戦争について、キリスト教関連の市販本等にも私が投稿している内容で、以下に簡単に紹介します。日本の教会から出て行って海外の教会等で話されている内容でもあります。預言によって、国内外の教会数・信徒数を増やし、毎週オーケストラ付の賛美、毎年新しい歌集・CD、海外にいくつもの孤児院等を進めている日本の教会もあります。各教会、各人で預言等の研究をお薦めします。

1)　預言

(1)新約時代・教会時代・現代にクリスチャンが預言することを薦める内村鑑三の言葉

(2)現代において預言することを薦める日本基督教団　高砂教会の手束正昭牧師の言葉、日本基督教団　高円寺東教会　小西芳之助牧師の言葉、日本基督教団の教憲「使徒と預言者との基の上に建てられ、代々・・かくして成立したのが日本基督教団である。」

(3) 日本基督教団出版部の『新約聖書略解』（Ⅰコリント 13:10「完全なものがあらわれたら」とは「キリストが再臨されたら」を意味する。）キリストが再臨されるまで、不完全なもの（預言、異言、知識）は、すたれず、続きます。『ウエスレアン神学事典』「パウロは預言と

いうものを、教会の歴史上継続していくであろう本質的な機能と考えていた」。カトリックの『聖書思想事典』「真の預言的活動は、霊の識別の法則によっていつまでも確認される・・これは今日でも通用する」。
(4)現代の預言は、旧約時代の預言とは異なり、必ず教会の管理のもとで、預言を語り吟味・検討して神からのものだけを選ぶ必要があります。また、(ｱ)預言等の御霊の賜物と(ｲ)愛等の御霊の実の(ｱ)(ｲ)両方を求める必要があります（Ｉコリント 14:1、29、31 等）。
2)　イスラエル戦争（争いがあるときは双方の言い分を聞く必要があります。）
(1)反イスラエルの意見
　高橋宗瑠　大阪女学院大学教授「パレスチナ紛争」を語る日本人に欠けている視点 2023 年 10 月 17 日東洋経済 ONLINE。早尾貴紀　東京経済大学教授 2024 年 5 月 31 日　記事：平凡社。
(2)親イスラエルの意見
　中川健一牧師　3 分で分かる聖書 Q397「イスラエルはジェノサイド国家ですか」2024 年 5 月 23 日ユーチューブ。パウロ弓野牧師　世界の終わりは　はじまっています 204「ハマスの情報に惑わされるメディア」2024 年 5 月 8 日ユーチューブ東京町田教会 TLEA。
(3) 聖書のほか、イスラム教のコーランにおいてもイスラエルの民にカナンの地は与えられ認められています（コーラン 5 章　食卓の章 20 節 21 節、17 章　夜の旅の章 104 節）。イスラエルを祝福するものは祝福されます。

以　上

岩井要先生と青い祈祷室

岩佐 明彦（1994 年工学部建築学科卒）
在舎 1992 年 4 月―1996 年 3 月



2000 年に博士課程を終了し、新潟大学を経て 2015 年より法政大学デザイン工学部建築学科教授。
災害時に建設される応急住宅を研究しており、最近はイタリアまで調査範囲を拡げています。

手元に一冊の作品集がある。書名は「天と地をつなぐ空間　教会堂」、我らが東大 YMCA の会館を設計した建築家、岩井要先生の作品集である。

岩井先生と親しくさせていただいたきっかけは約 30 年前、20 周年を迎えた会館の改修プロジェクトである。老朽化しつつあった会館の改修が、馬場先生、徳久先生はじめ多くの OB のご尽力で実現することになり、在舎の建築学生としてその改修委員の末席に加わることとなった。

改修委員会では、施工する建設会社との打ち合わせに毎回参加させていただいた。改修は壁紙の張り直しや一部の塗装が中心だったが、改修箇所やその仕上げ方法などを手際よく決めていく岩井先生のお仕事ぶりを間近で拝見することになった。少しは建築の知識が役立てることはできるかと意気込んで参加したもののやや肩透かしを食らったが、その後、工事中の代替宿舎を借りず、居ながら改修を行うこととなったため、工事の進捗に合わせて舎生をあちこちに移動してもらう舎生大移動の司令官を務めさせていただいた。些末な役割ではあったが、場を維持しつつ空間を更新するという営みの一端に関わった経験は、今にして思えば得難いものであった。

改修を終えて見違えるようにきれいになった寄宿舎で再び過ごし始めてしばらくした頃に、岩井先生から連絡をいただいた。作品集を出すのでその手伝いをしてほしいとの依頼であった。岩井先生はすでにご自身の設計事務所（真建築設計事務所）を店じまいされており、所員さんなどもいらっしゃらなかったので、身近な建築学生としてご指名いただいたのだと思う。お手伝いの内容は、作品集の後半部分の図面集のレイアウトで、お預かりした図面を切り貼りし、版下原稿を作成した。完成した版下は、たしか花小金井のご自宅までお持ちし、昼食か何かをご馳走になった記憶がある。

手元にある作品集はお手伝いの褒美に頂戴した一冊である。作品集には岩井先生が真建築設計事務所を主宰していた 1965 年から 1995 年のあいだに手掛けられた教会堂・集会施設 30 作品が掲載されている。あとがきによると作品集に掲載できなかった教会堂が 12 あるとのことなので、30 年の建築家のキャリアのなかで 40 以上の教会堂に携われたことになる。日本基督教団銀座教会やかつて神田美土代町にあった東京 YMCA 国際奉仕センターもその作品の 1 つである。

掲載されている 30 作品のほぼ全ては鉄筋コンクリート造で、外装のアクセントにはタイルやレンガが用いられ、しっかりとした安定感を感じさせる。岩井先生が大学卒業後に独立する

までお勤めになった郵政省建築部は、戦前より逓信省建築部として知られ、権威性を廃し、機能性・合理性を追求したモダニズム建築を確立し、多くの建築家を輩出してきた名門設計組織である。作風にたしかに逓信建築の堅牢さの系譜を感じさせる。

教会堂の設計は、一般的な建築と比べて、参照しうる定型を欠く。そもそも建築される数も限られているし、祈りのかたちに唯一の解はなく、それぞれの共同体のあり方が空間に強く反映される。岩井先生は郵政省建築部時代より、「教会建築研究会」に参画し、教会堂の使われ方を研究されており、1964 年に発刊された「教会建築図集」に関わられている。岩井先生の手掛けられた教会堂の平面計画を見ていくと、多くの教会堂は礼拝堂だけでなく様々な諸室が組み込まれ、和室が設えられたものもある。多くの事例研究に裏付けられながら、教会堂が信徒の集う場所として様々に活用できるように細やかに設計されていることが分かる。それぞれの教会の祈りの形を大事にしながら、信徒の集う場を整え、天と地をつなぐ空間を形にしていったのだろう。

改めて作品集のあとがきを読むと、牧師の家庭に生まれ育った岩井先生が建築の道を志したのは、お父様が手掛けた木造の小さな礼拝堂兼牧師館の建設を目の当たりにしたことだという。大学卒業後、建築家になるか悩んで恩師に相談した時に、お父様の職業を問われ、「キリスト教の牧師」だと告げたところ、建築家修行の耐乏生活にも耐えられそうだと恩師も安心し、建築家の道を勧められたというエピソードが語られている。そういえば、私が作品集のお手伝いで、岩井先生とお話していた時に私の父の職業が話題になったことを思い出した。父も祖父も大学教員で工学を専門にしているとお話したと思うが、どういう文脈でそんな話をしたのか覚えていないが、ひょっとしたら私の建築家としての適性を探っていたのかもしれない。岩井先生は、「建築事務所を 30 年やってきたけど事務所を続けるには 1 年に 12 軒ぐらいコンスタントに住宅を設計しつづけないといけない、けっこう大変だよ」なんてお話をざっくばらんにしてくださった記憶もある。岩井先生の婉曲的なご指導もあってか、私は建築家にはならず、大学教員に導かれ現在に至っている。

この文章を書いていて、もう一つ思い出したことがある。寄宿舎の改修時には、岩井先生は耐久性やコストを重視しながら改修に用いる壁紙や塗料を選定されたが、唯一祈祷室の壁紙だけはこだわり、真っ青な布製の壁紙を指定された。確か値段も高かったように記憶している。「濃紺色は色褪せが早いんだけど、心が静まる色だよね。」とおっしゃっていた。祈祷室は改修後の会館で私のお気に入りの部屋となり、よくひとりで過ごしていた。今回、改めて作品集を見返してみると作品集の表紙は、銀座教会の礼拝堂の写真で、天井のステンドグラスから青い光が礼拝堂に注がれている。青い海底に身を沈めるかのように、心を静謐へと導く場なのだろう。ひょっとしたら、あの祈祷室は岩井先生がそっと寄宿舎に潜り込ませた「天と地をつなぐ空間」だったのかもしれない。あの青い祈祷室は現在の会館に残されているのだろうか。ひっそり訪ねてみたい気になった。

東大 YMCA の今昔

五百旗頭　薫（1996 年法学部卒）
在舎 1992 年 4 月―1996 年夏頃



略歴・近況

1992 年六甲学院卒。1996 年東京大学法学部卒。日本政治外交史を専攻する研究者となり、助手・講師・東京都立大学助教授（首都大学東京准教授）、東京大学社会科学研究所准教授を経て現在、東京大学大学院法学政治学研究科教授。東大 YMCA の顧問も務める。

写真は、2025 年 11 月 22 日、駒場祭での東大 YMCA の出店を訪問した時のもの。飲茶を頂いた。

金曜日の夕食はいつもカレーだった。平日の朝食・夕食を支度して下さる林田縫子姉が、毎週金曜日の夕方前には、コクと酸味のあるカレーをたっぷり作って下さっていた。昔、ある先輩舎生が、カレーが好きだから平日の終わりはカレーにしてくれ、とリクエストしたらしい。メニューを考える負担を週一回減らしてくれる粋な配慮だった、と林田姉は何度もおっしゃっていた。舎生の方でも林田カレーは人気だった。金曜日の夕食はもちろん、土曜日の朝食や昼食もカレーを体内に流し込む舎生が（私含め）いた。週末のトイレからは、カレーの臭いしかしなかった。

原稿が募られた時に、最初に思い出したのはこのことだった。だから筆を執らなかった。東大 Y は生活の場であったから、所帯じみたこと、自堕落なこと、エゴ丸出しのことばかり思い出される。臭いものに蓋をするように、寄稿の呼びかけは見なかったことにした。

しかし私は昨年夏、自宅の工事の関係で三週間ほど OB として泊めて頂き、感謝の念を新たにしたところだった。その際に、在舎当時の様子を回想する機会に恵まれてもいた。気がとがめ始めたところで、中村義哉兄から、あなたも何か書きなさい、というお誘いが来た。思い出すままに記す（現在の舎について私の記憶に自信がないところは、現在、在舎されているウィジャヤ・テオドルス兄にメールで聞くと瞬時に教えて下さった。テオ兄、ありがとう。もちろん、誤りがあれば全て私の責任である）。

私が入舎したのは 1992 年春、大学入学と同時だった。

本郷通りからガラス扉を入る。後方で扉が閉まると、かえって外の風の音が強く聞こえる。聞きながら階段を上がり、二階の玄関で靴を脱ぐ。このあたりは今も昔も同じである。やはり同じく廊下左手に事務室、次いで談話室がある。当時、時間帯によっては事務室に加藤せつ姉がいらして、しみいるような笑顔で迎えて下さった。舎生を子供のように想って下さっていて、がっかりさせると、なぜいけないか静かにお話しになった。さらにひどいと、目に涙を浮かべていらっしゃることがあり、これはこたえた。

廊下突き当りの食堂に入るとさらに数歩の通路があり、その先で三段ほど降りると正面から

左手に食堂本体が広がり、右に入ると台所であるが、このあたりの間取りも今と同じである。当時は通路左手の本棚に沿って椅子が並んでいて、座面に主要新聞がずらりと並んでいた。食卓にはスピリッツ、ヤングジャンプ、マガジンといった漫画雑誌の最新号が置かれていて、漫画好きにはありがたい環境だった。読んでいると林田姉が台所からスタスタと出現して、「勉強熱心ね」などとからかい、ワッと笑う。昨日のことのようだ。

加藤姉も林田姉も亡くなられたことが本当に寂しい。

生活態度が悪いと、林田姉が雷を落とした。気の利く舎生がいれば、加藤姉を悲しませぬように、林田姉の雷が落ちないように先回りして申し合わせ、従わない者がいれば忠告や警告に及んだ。舎の秩序のこれが基本であった。

食堂にはテレビが二つあり、一つは食堂本体の左手の棚の上に置かれた小型テレビだった。入舎当時の舎生の中心は三沢和彦兄で、ひどい近眼だったので、立ってかぶりつきでこのテレビを見ていた。テレビで面白いことを言うと、我々の方を向いて破顔大笑された。実は立派な科学者で、レーザーの研究のし過ぎで近眼になったと私は信じていた。

もう一つ、北西の角のテレビにはビデオデッキがつながっていて、誰かがレンタルビデオ屋で借りたビデオテープを「ガチャコン」と入れて見始めると、居合わせた舎生は面白そうなら一緒に見て、そうでなければ見なかった。

スーパーファミコンもつながっていて、明け方までストリートファイターIIで闘ったこともある。私は操作性の良い春麗ばかり極めて勝ちに走ったので、先輩舎生に苦言を呈されたことがある。

今でもゲームは、新しい機種が食堂にあるが、あまり遊んでいる様子は見なかった。たしか漫画雑誌はない。新聞は日経・朝日・Japan Times・NY Timesを備えていて、さらに舎生個人で朝日を購読する人がいるらしい。舎生が思い思いの食材を置けるように冷蔵庫が増え、何よりも入って左の壁に沿って個人用のロッカーが出現し、それぞれシリアルとかプロテインとかを入れている。

コーヒー人口が増えた。手回しで淹れる人が増え、そこまでしない人・時のためにはネスプレッソのコーヒーマシンが神棚のように鎮座している。これも有志が買ってきたコーヒーカプセルが食卓にストックされていて、原価くらいのお金を寄付すれば飲んで良いことになっている。ずっと赤字らしく、まさに有志である。コーヒー豆を炒るところから研究している篤志家もいるが、まだ成功したとは聞いていない。まさに篤志だ。

要するに紙媒体の定期刊行物は漫画については見当たらなくなり、ライフサイクルの多様化を象徴するものが代わりに増えている。だが新聞は健在で、購読紙の国際化が進んでいる。食堂の居心地がよく、人が集まるのは変わりない。そのための仕組みも合理的にできている。

今の舎生の諸兄・諸姉は皆、聡明でフレンドリーで、何よりも一生懸命生きている。交流すると楽しいことばかりだった。時折、誰かのことを思い出して、論文や就活がうまくいっているかしら、と思い、成功を祈る。家族が増えたような心地がする。

一番大きな変化は、もちろん女性の舎生が出現したことだろう。女子トイレが増えたはずだし、私が気付いたところでは浴室が増えた。今は二階の事務室・談話室の向かいも浴室になっている。その代わりシャンプーやリンスは各自が持参することになっている。

私の在舎時代には、浴室は四階の一か所にあるだけで、誰かが浴室で衣類の手洗いを始めると渋滞した。

当時、外部との連絡手段は三階と四階の中央に置かれた電話だった。十円玉をガチャン、ガチャンと入れながら話す。恋人とぼそぼそ話している先輩舎生もいた。私は色気なく、主にサークルの打合せで使っていた。つい声が大きくなり、目の前のホワイトボードに「もう遅い時間だから声を落として」と書かれて意気消沈したことがある。

今は三階にだけ電話・ファックス兼用機がある。そこにかかってくることはあるが、そこからかける舎生はいないようだ。もちろんコイン式ではなくなっている。

私がいる間に、個室に自分の固定電話を置くことが急速に普及した。部屋に戻ると留守電のランプが点滅していて、「おっ」と思って聞いたが、やがて面倒になって滅多に聞かなくなった。するとある日、父が寮にやって来たので驚いた。私が生きているか確認するためだという。

家族が電話しても私はいない。食堂の居心地が良く、部屋に上がるのは真夜中だったり明け方だったりで、留守電を聞いても折り返さず忘れてしまう。そもそも聞かずに何日も過ごす。

連絡がつかない場合、実家にとっての生存確認手段は、預金の引き落としである。ところがこれにも全然動きがない。当時の舎費は会計担当の舎生に手渡ししていたと思う。月 3 万円台だっただろうか。まとまった現金を一度引き出していれば、しばらく足りる。それで朝食と夕食は林田姉が作って下さり、夕食はボリュームがあって、一品か二品、次の日の昼に回せば私には足りるほどだった。週末はカレーだけでかなり籠城できる。私はお酒が飲めなかったので、飲み会にもいかず寮と大学を行き来し、行き来すらさぼることがあったので、とにかくお金を使わなかった。

部屋の本に飽きると、四階の図書室や三階の祈祷室を漁れば何かしら読みたいものがあった。祈祷室に座って読んでいるとゆっくりと日が暮れ、長い夜が来る。当時、古参の舎生でカワウソというあだ名の先輩がいた。私もカワウソが鼻と目と耳だけ出して沼を徘徊するように、少しずつ古びていく建物の中で過ごしていた。

カワウソの生態は親の知るところではない。母が特に心配し、結局、父が出張のついでに本郷に来てくれたのだった。私はろくに感謝も謝罪も口にしなかった。あの頃は、親は永遠に生きているものだと決めつけていた。子供だった。

落穂ひろいのように最後に一つ、間取りについて思い出したことを記すと、三階の奥に卓球部屋があった。その名の通り卓球台があって時折 ping pong と聞こえてきたが、むしろ読まれなくなった漫画その他の物置のようになっていた。片付けた方がいいという声が何度か上がり、リフォームの時に結局、片付けたかと思う。

私の在舎中に寮の大規模なリフォームがあったのだった。舎生の側では建築学科にいた岩佐

明彦兄が中心になって尽力された。岩佐兄は日頃から研究室での製図や指導に忙しかったようで、真夜中や明け方に顔面蒼白で帰って来ることが多かったが、寮に帰ると何くれとなく動き、舎生をまとめて下さっていた。

反対に、一番役に立たなかったのが私である。私は既にお察しの通り生活能力がなく、親元から離れてからほどなくして昼夜が逆転し、一年生と四年生の時に特に体調を崩した。リフォームは私が四年生の時だったと思う。入院した私の世話に母が上京して寮に泊まり、リフォームのための私の部屋の片付けもしてくれた。

リフォームが終わった頃に退院したかと思う。食堂でリフォームの打ち上げをしていたか、多くの舎生が集まってそういう雰囲気になっていたかの時に私も居合わせ、さすがに恐縮していた。岩佐兄が私にも何か、と思ってくれて、「ベスト・マザー賞」というのを授与してくれた。母以外に褒めるところがなかったのだ。

私が役に立ったのは一つだけ、ちょうど食堂入ってすぐ右の冷蔵庫と壁の間に何かが落ちたか挟まったのだと思うが、病後痩せていた私は苦も無く隙間に入って回収できたことであった。後日、加藤姉と林田姉に怒られた。加藤姉は、もし隙間に入っている間に私の具合が悪くなったらどうやって救い出そうか、と心配でならなかったらしい。林田姉は、加藤姉もいらっしゃるところで私がパジャマのまま降りて来たのにお怒りだった。

このあたりから臭いものの蓋が開き始める。

私はとにかく貢献しない舎生だった。

まず、東大Ｙのサークル活動に身が入らなかった。衣食住を得るという大きな目的が共通しているだけに、それを除いた各舎生の関心や考えはばらばらのはずだと思っていた。だから舎外のサークルやゼミに打ち込んだ。同じように、寄宿生活のルールにも忠実とはいえなかった。特に反抗的だったのではなく、とにかく生活上の自己規律がなかったのだ。

かすかにでも周りからの厳しい目を感じると、それが生活の場であるだけにこたえた。三沢兄や岩佐兄に叱られたら衝撃で、当時の私なら逆恨みしたかもしれないが、お二人とも驚くほど優しかった。他方で根気よく忠告して下さる先輩舎生が複数いらした。私も本当のアウトローになる覚悟はなかった。外部のサークルで悪友だった井川貴博兄が入舎してきて、東大Ｙでも悪友となり、かつ私の言動が一線を超えると苦言を呈するようになった。食堂での夜更かしが増えた責任の一端も井川兄にあり、腐れ縁は今でも続いている。

こうして徐々に軌道修正し、かつ古参になる中で、いつしか居心地がよくなっていく。だが居心地が悪い間に、自分を正当化すべく、当時から「立憲主義」と呼んでいた考え方が私の中ですっかり根付いてしまった。

それは人を批判したり、それどころか集団の中で何らかのイニシアティブを取ったりするのは、周到な手続きを踏むのはもちろん、表立って反対しない人たちの内面も深く慮ってからでなければ認められない、といった考え方だった。およそ政治らしく見えること全てへの敵意だった。せっかく良いイニシアティブを取ろうとしてくれている舎生を、非難してしまったこと

もある。こういう非難こそ有害無益の政治ではないのか、といった自省が当時の私には欠けていた。

食堂ノートを見れば、私が誰かと論争している連続が時代の一側面に見えてしまうかもしれないが、皆様が私を持て余しているのが実態だっただろう。

今の舎生は問題があれば総会で時間をかけて討論し、また Discord のようなチャットアプリで意思疎通しているので、食堂ノートはよほど静かになっている。言い換えれば、かつては食堂ノートを通じて、舎生間のいさかいは大人たちにほぼ筒抜けだった。

林田姉は大仰な言動が嫌いな方だった。食堂ノートに私が書き散らしていることに対しては、「けんかになっちゃったね(笑)」とおっしゃるくらいで、それだけでも私はギクリとしたが、私が偉そうに書いていることと生活態度のギャップが目に余ると、明るいがきっぱりした声で「格好悪いね」とおっしゃり、理由を短く言って立ち去られた。毎回、図星だった。しょげていると、その場でか何日後かに、「五百旗頭さんはごあいさつだけは立派なのよねー」とあきらめたようにおっしゃり、それが（とりあえずは）許してもらえたという合図のようなものだった。

その私が今は政治を研究する学者の端くれになっている。寮生活の遺産はある。政治の世界で誰がどうやって勝つかにはあまり興味がなく、そもそも政治抜きで解決できないのか、どういう時に政治が必要になるのか、といったことに関心を持つことになった。政治の世界である対立があれば、それは適切な対立なのか、第一に社会の中の亀裂を代弁し、第二に社会を分裂させない程度にはデフォルメできているのか、といったことに漠然とした関心があり、明治中後期・大正初期の対立の演出者だった大隈重信の研究から始めた。

私が東大 Y のサークル活動に不熱心だったもう一つの理由は、聖書への苦手意識だった。私の「立憲主義」にはコモンセンスが欠けていた。聖書の端々に記された道徳的教訓に私は関心を持てなかった。哲学の方が深くて鋭いと考え、寮で聖書を研究する会合にはしばしば欠席・遅参し、参加すると一知半解の哲学の知識を使って聖書の解釈をずらしたり反転させたりして喜んだ。聖書くみしやすしと思っていたのだ。舎生の反応は極めて適切で、私が新しい視点を持ち込んだことは歓迎しつつ、時に強く、時に婉曲に違和感を表明してくれた。

聖書の輪読は、東大 Y の中で相対的に好きな活動になった。何といっても私が相対的にでも歓迎されるのはこの時だった。

立教大学から佐藤研先生が教えに来て下さったことが決定的だった。学者としての役割意識からか、ご自分の信仰を押し付けないよう配慮されていたと思う。でも博識で、解説が本質を衝いていた。誰かの言うことが面白いと思われたら、その観点を豊かに育てる知識を注いで下さった。私にそれが当たると、背中から羽が生え、天井まで拡がったかのように気持ちが高揚した。

聖書の記述から乖離しているという批判を受けずに目立つために私が選んでいった戦略は、終末論への傾斜だった。現代の読者が理解に苦しみそうな、荒ぶる神や世の終わりについての

記述を取り上げ、なるほどと思わせる思想的な含意をくみ取ってみせ、実用的・教訓的に見える箇所は終末の炎で燃やしてしまうことだった。そのための語彙が豊富なカール・シュミットやヴァルター・ベンヤミンを読むことが多くなった。結局は、聖書の渦潮に引き寄せられていったのだった。

今の世界を見ると、「世も末だ」と思うことがある。ちょうど中央公論の時評を頼まれており、毎月の締め切りが近付くにつれ、何と言えば良いのか途方に暮れることがある。だがどこかで、「世の末に生まれてオモチロイ」と楽しく考えている自分がいる。寮生活の後遺症だろうか。

これで臭いものを浄化できたとは思わないし、この文章の、特に後半が読者にとって何らかの意味を持つかは疑問である。私にとっては意味があり、執筆しながら、在舎時代にご一緒した諸兄一人一人が浮かび上がってきた。あまり親しくなかった舎生の、顔や声や佇まいまでくっきり浮かび上がってくる。生活を共にするとはこういうことだった。生活の場だから起こる共感と対立、それと密接不可分に行われるサークル活動、両方にまたがる聖書と祈祷と讃美歌。豊饒な寄宿舎であり、学び舎であった。当時の私は理解していなかったのだが、ただ居るだけで多くのものを得た。

「ほっといてくれ」という「立憲主義」と、万人を巻き込む終末論とは矛盾しているはずだが、それに対する自省もなかった。相反する心象風景を抱きながら、学生時代の私は、ガラス扉から出かけ、ガラス扉へと帰っていった。

1980 年代以降の 20 年間における、寄宿舎としての東大 Y の変化と不変

中村 義哉（2000 年経済学部経済学科卒）
在舎 1995 年 4 月－2006 年 3 月



略歴・近況
大学院では福祉労働を研究。30 代半ばで出身地の大阪に戻り、福祉の現場に入る。以降、福祉事業所の勤務・経営、地元の大学での勤務を経て、現在は賛育会病院で働いている。

1. はじめに

本稿は、会報第 130 号（2008 年）に寄せた、「最近二〇年間の寄宿舎としての東大 Y の変化と不変――舎内総会議事録（一九九八～二〇〇七）を通して――」を改稿したものである。なお、この副題（の期間）は実は誤りで、正しくは会報第 130 号の本文に記した通り、創立 100 周年以降の 20 年間、1998 年 1 月から 2007 年 12 月までの舎内総会議事録をもとにしている。

2. 外部との関係

【学 Y 活動】

98 年当時は、日本 YMCA 同盟の夏期ゼミ運営委員会が東大 Y で開かれており、08 年当時と比べると、学 Y 活動の距離は近かったようだ。以降の 20 年間を通して、東大 Y 全体としての学 Y 活動との距離は、途切れはしないものの、全体として大きく近づくことはなく、1997 年 3 月には、入舎選考会において署名が求められる「承諾書」の中から、「夏期ゼミなど年 5 回の学生 YMCA の活動に参加すること」という項目が削除されている。ただ、学 Y の行事等は、食堂ノートや舎内総会で共有されており、舎生の中でも総務部員を中心に参加者は連なっていた。

3. 入舎・在舎

【入舎選考会】

入舎選考会は、寄宿舎運営において最も重要な行事の一つである。これに関しては、最近 20 年間（当時）の会報でも、第 95 号（91 年）から第 98 号（92 年）まで連続して論考が寄せられている（第 95 号特集「入舎選考と寄宿舎の在り方」・馬場進専務理事「入舎選考の重要性について」、第 96 号特集「続・入舎選考会と寄宿舎の在り方」・柴谷光信「退舎にあたって」、馬場進専務理事「東大 YMCA の進路（改題）」、三沢和彦「キリスト者またはキリスト者たらんとする者」、第 97 号特集「東大 YMCA の今後を考える」・三沢和彦「（第 1 回）入舎選考会に伴う最近の問題点」、第 98 号三沢和彦「YMCA の今後を考える（第 2 回）」）。

ふり返るに、入舎選考会に際して寄宿舎が抱えていた問題は、20年間を通して大きく変わらず、いつも新たに問い直され続けていた。

もっとも、入舎選考のシステムは、以下のように変わっていった。88年当初は、入舎面接のみであった（つまり、面接がすべてである）。ただ、30分から1時間程度の面接のみで判断することが難しいケースが多く、88年11月の舎内総会において、応募者から事前に「私とキリスト教」と題する作文を提出してもらうことが決まった。さらに91年4月の舎内総会において、簡単な調書形式の応募要項を作ることが決議された。これ以降は、選考会の前に30分程度の「プレ選考会」を開き、作文と応募要項をもとに、舎生同士で意見交換と質問内容の調整を行うようになった。なお、02年10月までは、これらがどのような内容でも、ともかく選考会は開催されていたが、お互いのすれ違いを小さくするために、以後は次のような手配をとることになった。①見学に来た希望者に対し、舎が求める人材（「キリスト者もしくはキリスト者たらんとする者」）と作文に書かれるべき内容について、より詳しく説明する。②提出書類の内容を舎生全員で共有・検討し、その段階で受け入れが明らかに困難と判断された場合には、応募者にその旨を伝え、まず近隣の教会に通ったり、舎の行事（木曜集会）に出席したりすることを勧める。③そのうえで再度申し込みをすることは、むろん歓迎されることを伝える。

入舎選考会本体に関する大きな変化としては、面接後の議論に、時間制限が導入されたことが挙げられる。92年5月の舎内総会議事録にその決議があり、それが何時間であったかは確認できなかったが、筆者の入舎当初（95年4月）から、「議論は2時間まで。ただし、まだ議論が出尽くしていない場合は、延長できる」との目安があった。なお、全会一致で賛成が得られなければ入舎できないという基準は、当時から変わっていなかった。世代が少し上のOBと話していると、「自分が在舎していた頃は、入舎選考会の結論をめぐって、よく朝まで議論したものだ」という思い出話を聞いたものだが、それほどの長時間にわたる選考会は、この時期を境として姿を消していった。

【入・在舎制限】

＜留学生枠＞

当時の舎生が日常的に直面していた大きな在舎制限は、外国人留学生枠だった。89年2月の舎内総会では、「留学生の枠は全体の10%（引用者注：当時の定員は25名だったので、3名となる）、1国1名。例外はその都度話し合う」とされた。それが、97年3月の舎内総会では1国2名まで、さらに98年2月の舎内総会では合計5名・国別2名という総量が絶対的であると確認された。98年6月の舎内総会では留学生の上限が絶対5名から、原則5名と見直され、06年1月の舎内総会では、5名プラス2名まで認めるとされた。留学生枠が拡大し続けた背景には、留学生の入舎希望が常にその枠を超えて存在し続け、枠を超えた入舎希望を断っている一方で、日本人学生が埋めるべき空き部屋が多かったことがあった。

この隘路を打開する方法として一時期用いられたのが、いわゆるゲスト制度である。ゲスト

とは、入舎選考会を経ず、本会事務局を通して入舎してくる留学生で、半年から 1 年程度の短期滞在を前提に、場合によっては通常の舎生よりも若干高い費用を払って、在舎していた。ただ、ゲストが舎内の活動にまったく参加しないために、彼らとの交流がほとんど図られないことへの危機意識の高まりと、ある時期の舎生数の増加＝空き部屋の減少に伴い、01 年 9 月の舎内総会において、ゲスト制度の廃止を理事会に提案する決議がなされた。標記期間においては、その後もゲスト制度は原則として復活しておらず、留学生も日本人も、同じ舎生としての入舎選考会を経て入舎することが続いた。

＜博士課程学生の在舎＞

当時の日本人舎生にかかる制限の第一となったのが、いわゆるドクター条項である。留学生に関しては、母国の大学を卒業後に日本に来る経緯から、従前も博士課程の学生の在舎が許されていた。しかし日本人に関しては、以前は博士課程の者の在籍を認めていなかった（たとえば、90 年 12 月の舎内総会で、「日本人は修士まで、博士は例外なく認めない」との内容が確認されている）。それが、97 年 2 月の舎内総会を経て、日本人の博士課程学生の在舎（※修士課程から進学した場合の在舎延長）が可能となり、現在に至る博士課程学生の在舎の扉が開いた。

もともと、日本人学生の在舎年限は 4 年であった。大学入学と同時に入舎すれば 4 年で卒業、本郷進学時に入舎すれば 4 年で修士課程を終える関係にあったが、88 年当時から、在舎期限切れの舎生の在舎延長願いはその都度出され、そのほとんどは承認され続けていた。博士課程の学生の在舎が認められるようになって以降、4 年の在舎年限は当然、絶対的なものではなくなっていく。他方、留学生の在舎期限は 2 年であったが、日々の生活で、日本人舎生よりもはるかに積極的に舎内の活動に参加する者が多く、彼らの在舎延長願いに対しては、「むしろぜひ残ってくださいと言いたい」と請われるような形で、在舎延長を認められることが多かった。

＜女子学生の入舎＞

このように、男子学生に対しては「間口」全体が広がり続ける一方で、女子学生の入舎は当時まで実現していなかった。当時はおよそ数年に一度の頻度で、女子学生の入舎に関する問い合わせがあったが、その都度の審議の末、女子学生の受け入れを否決し続けていた。むしろ理事会の方が女子学生の入舎に積極的で、04 年度にはいったん、舎生募集ポスターから「男子学生」の文字が消えた時期もあった。ただその後、05 年 2 月の理事会において、舎生側の多数意見として、これからも男子寮として運営を続けたい希望があること、また現状としても、男子学生のみで本会の予算編成に支障を来さない人数を確保できる見通しを報告・主張し、再び「男子学生」と明記して、男子寮としての寄宿舎運営を続けることが了承された経緯があった。

4. 早祷・夕祷

寄宿舎における一番の基礎的な活動である毎日の集会は、88 年当時は夕祷（午後 10 時～10 時半）だった。遅い時間とはいえ、研究等でまだ舎に戻っていない舎生は少なくなく、97 年 9 月の舎内総会において、夕祷を早祷へ移行することが提案された。その後、98 年 3 月の舎内総会をもって、夕祷から早祷（午前 7 時半～8 時）への移行が決定した。61 年に早祷が廃止され、夕祷が導入されて以降、37 年ぶりの早祷の復活であった。

なお、07 年 10 月の舎内総会において、舎生の出席率向上を主な狙いとして、早祷から夕祷への変更案が出されており、結局のところ、毎日の集会への出席率の低迷とその向上は、いつの時代も課題であった。

5. まとめにかえて

ここまで、会報第 130 号（2008 年）に寄せた文章の中から、とくに人・活動の面に焦点をあてて、この頃の変化と不変について、改めて紹介してみた。元の文章では他に、【賄い】【電話・インターネット】【部屋】【仮宿】【浴室】【会計】といった項目があり、いま振り返っても興味深い 20 年間の変遷があるが、ここでは割愛する。

会報第 130 号の文章の終わりに、次のように書いた。「以上、1988 年 1 月から 2007 年 12 月までの舎内総会議事録をもとに、創立百周年後 20 年間の寄宿舎運営を追ってきた。現在、私の手元にはさらに遡って、1983 年以降の 5 年分の舎内総会議事録がある。これを眺めると、本稿に記したものとはまた別の展開も見出せ、実に YM は常に少しずつ変わり続けてきたのだなあ、という思いを強くする」。現役舎生だった頃、私は女子学生の受け入れに反対し続けてきたものだが、現在の YM が、留学生や女子学生をむしろ中心メンバーに迎えて、私が在舎していた頃よりもはるかに「多様性」の高い場となっていること、それこそが今の寄宿舎（生活）の大きな価値になっていることを思うと、感慨深いし、その変化を大いに歓迎したい。

現会館ができて 50 年、この年に私も 50 歳を迎える。人生 100 年時代と言われるようになり、コンクリート建築の寿命も 100 年が展望されるようになってきた。私はあと何年、YM と関わり、その変化と不変を見続けることができるだろうか。YM と深く関わりたい願いはあっても、現在の仕事や家庭の優先順位の高さゆえ、思うように時間を割けないことが多いが、許される限り、今後も、いまと未来の舎生の生活・信仰を含む交わりの場を支え、応援していきたい。

東大 YMCA なくして我が信仰なし

関　智征（2003 年法学部卒）
在舎 1998 年―2003 年 3 月



略歴・近況
目黒駅にある日本キリスト教団　行人坂（ぎょうにんざか）教会　牧師。非常勤講師先のフェリス女学院大学の教え子が洗礼を受けたり、献身して神学校を目指したり、若い方の育成に力を入れています。

私がクリスチャンになったのは、20 年以上前、東京大学 YMCA 寮に住んでいた時のことです。
もともと「正月は神社、お葬式はお寺、クリスマスはケーキ」という日本の家庭で育ったため、キリスト教にはまったく縁がありませんでした。ところが大学入学後、所属していた体育会テニス部の練習場の近くという理由で YMCA 寮に入ったことが、信仰との出会いのきっかけになりました。

寮では毎朝、讃美歌を歌い、聖書を読み、祈る「早祷（そうとう）」が行われていました。クリスマスには劇や合唱をするなど、温かい共同体の記憶が今も残っています。当初は「聖書は世界共通の教養の一つ」と軽く考えていましたが、次第にそれが「生きるための言葉」へと変わっていきました。

大学 4 年生の頃、人間関係の中で赦せない出来事が起こり、怒りに支配されていました。「悪いのは相手で、自分は被害者だ」と思い込み、憎しみに囚われていました。しかし、いくら相手の変化や謝罪を期待しても、何も変わらない。そんな時、ふと立ち止まり、自分の心を見つめ直しました。
聖書が語るように、相手を憎む心こそ「罪」であり、その罪をも神が赦してくださっているなら、私もまた赦せるかもしれない――。そう思った時、心の中に一筋の光が差し込みました。一緒に寮に住んでいた友人たちに支えられながら、信仰のすべてを理解していたわけではありませんが、洗礼を受けました。

「御言葉が開かれると光が射し出て、無知な者に理解を与える」（詩篇 119:130）

洗礼を受けてからは、同じ聖書の言葉でも、心への響き方がまるで変わりました。聖書を読むたびに、人間関係の知恵や生きる力を受け取る喜びがありました。やがて、自分の小さな過ちや無自覚な言動が人を傷つけていたことに気づかされ、「赦されて生かされている」ことの意味を深く悟りました。その時、「この赦しの喜びを人に伝えたい」と強く思うようになり、牧師を志す原点となりました。

YMCA 時代、仲間たちが私の早祷での話を聞いて「関さんは、日常の出来事と聖書の真理を独自の角度で結びつけて語る」と褒めてくださったことも励みでした。YMCA での日々が、牧師としての歩みを意識する最初の一歩でした。

卒業後は社会人として約 20 年間働き、現在は目黒駅近くの日本キリスト教団行人坂教会で牧師を務めています。お陰様で長男は 18 歳になり、教会で若者たちがバンドで讃美する「土曜アート礼拝（タバナ）」を立ち上げました。2025 年 10 月の礼拝には 74 名が参加し、日曜礼拝を超える恵みが与えられました。東大 YMCA からも南北線で一本で来られますので、ぜひ若い方々にもお越しいただけたら幸いです。大学生の時代に東大 YM でクリスチャンになった原体験から、10－20 歳代への伝道に使命を感じております。

「東大 YMCA なくして、私の信仰なし」

いただいた恩を、今度は次の世代に恩送りしていきたいと願っています。

兄に囲まれた長男

田川義之（2009 年工学研究科卒）
在舎 2000 年 4 月―2009 年 3 月



略歴・近況
2009 年東京大学大学院博士課程修了。現在、東京農工大学教授。流体力学を専門とし、衝撃現象や可視化計測の研究に従事。大学発スタートアップの設立にも関わる。東大 YMCA 評議員。趣味はチェロ。妻と娘の三人暮らし。

突然できた「兄」たち

2000 年、大学入学と同時に東大 YMCA に入寮した。私は長男として育ったが、寮に入ったその日から、突然たくさんの「兄」に囲まれる生活が始まった。しかも皆、遠慮なく意見を言う。議論も容赦ない。長男としてそれなりにしっかりしてきたつもりだったが、ここではすぐに「末っ子」になった。

男子寮の生活は濃密だった。夜通しサッカーゲームに興じ、気づけば窓の外が白んでいる。「これはまずい」と言いながら解散し、数時間後には何事もなかったかのように授業に出る。体力は削られたが、心は満たされていた。グラウンドではソフトボールに汗を流し、勝っても負けても最後は笑い合う。長引いた舎内総会後は、深夜の白山ラーメンへ向かった。

議論の食卓

日常は、常に思索と隣り合わせだった。寮の食堂のテーブルには新聞が何紙も広げられていた。新聞によって同じ事実をこれだけ異なる報じ方をすることを初めて知った。さらに理系人材に囲まれてきた私は経済・国際・哲学・法学・公共福祉を専門とする兄弟たちとの議論の中で、「一つの正解を探す」姿勢よりも、「複数の視点を並べる」ことの重要性を学んだ。あるテーマを巡って徹夜で議論し、翌朝も結論は出ない。それでも複眼的に世界を見る姿勢は、その後の研究者としての思考の型にも深く影響している。

所属した企画部では、大学 2 年生のときに希望を通してもらい、富岡幸一郎先生お招きし、公開講演会を開催した。「使徒的人間 -カールバルト」という先生の著作に感銘を受けたが、当日の茶話会で本の読み方まで教えていただき、その方法は現在にも通じるものであった。杉山好先生のバッハの公開講演会も印象的である。音声の接続ケーブルにまでこだわる姿勢には驚いた。このように私が単身生活していたらほぼあり得なかった、外部からの知的刺激を受けるたびに、寮という場が単なる住まいではなく、思索の場であることを実感した。さらに聖研部に移り、またも希望をきいていただき、東京神学大学の近藤勝彦先生を講師として、組織神学をふまえた聖書の読み方を学んだ。神学議論は難解だったが、その奥には人間存在の根源的な問い（中断される人生）が横たわっていた。

キリスト者たらんとするもの

9 年も在籍していたことをふりかえったとき、入舎面接の「キリスト者たらんとするもの」という合格基準は、私の内面を何度も揺さぶった。入寮面接を受ける側であったときより、面接する側になって、真剣に考えさせられた。何を信じ、どのように生きるのか。寮内の議論は白熱し、ときに沈黙が流れた。何かの拍子に類似の議論をすることはあった。しかし、入舎面接で決定的に異なるのは、最終的に入舎の可否を決断しなければならないことである。全員一致が原則でありながら、100%の確信を得たことはない。

受洗と音の記憶

入舎してしばらくして、YM の先輩に連れられて聖ヶ丘教会を訪れた。その年のクリスマス、受洗の決断をした。YM の礼拝堂では趣味のチェロを毎日のように弾かせていただいた。礼拝堂のおかげで、生涯の趣味といえるものが得られた。音が木の天井に反響し、やがて消えていく。その響きは今も私の励ましである。

日常の温かさも忘れられない。事務局の方と一緒に近くの天ぷら屋で昼食をご一緒した。YM は思想の場であると同時に、人を包み込む場所でもあった。

支える側：学生主事

博士課程に進み、学生主事を務めた。後輩たちと向き合う立場になり、自分がいかに多くの支えを受けてきたかを初めて自覚した。悩みを打ち明ける後輩、将来に迷う学生、信仰に葛藤する者。それぞれの歩みに寄り添いながら、自分自身もまた問い直されていた。寮から三名の献身者が生まれたことは象徴的である。YM は、人の決断を無理に迫る場所ではないが、真剣に問い続ける環境は確かにそこにある。

2000 年から 2009 年までの九年間は、学部四年、修士二年、博士三年という時間の長さ以上に濃密だった。笑い、議論し、祈り、時に衝突し、また和解する。その繰り返しが、私の人格を形作っていった。

今も続く交わり

現在は評議員として関わらせていただいている。年月を経ても、YM で築かれた縁は不思議なほど自然に続いている。例えば今年（2026 年）、主宰する研究室発スタートアップの立ち上げに際しても、かつての YM の兄弟たちが助言や協力を惜しまなかった。学生時代の友情が、社会の現場で具体的な支えとなる。その経験は、YM が単なる青春の思い出ではなく、人生を通して生き続ける共同体であることを教えてくれた。

次の 50 年へ

私にとって東大 YMCA は、議論と祈り、笑いと葛藤、そして世代を超えた関係の積み重ねである。兄に囲まれた長男として始まった私の九年間は、今もなお私の根に流れている。次の 50 年も、この場所で多くの若者が問い、迷い、笑い、祈り、自らの軸を見いだしていくことを心から願っている。

東大 YMCA 寮で過ごした日々

三浦 真（2006 年経済学部経済学科卒）
在舎期間：2003 年 10 月～2007 年 3 月



公認会計士の三浦真と申します。私が東大 YMCA 寮に入寮したのは 2003 年、経済学部の学生だった頃のことです。学部卒業後は経済学研究科金融システム専攻修士課程にも 1 年間通い監査法人トーマツへの就職が決まる 2007 年 3 月まで寄宿舎で生活させていただきました。

2025 年 4 月に帰天した私の父は当時、日本キリスト教団吾妻教会の牧師でした。私は大学生の頃から富士見町教会に通っており、現在も同教会に通い続けています。教会の青年会で出会った女性と結婚し、現在は中学生と小学生の 2 人の息子がいます。

寄宿舎での生活からすでに 20 年ほどの歳月が流れましたが、当時の寮での日々は、今振り返っても私の人生の基礎を形づくった極めて重要な時間であったと感じています。

略歴・近況

2007 年 3 月 監査法人トーマツ（現有限責任監査法人トーマツ） 東京事務所入所
2012 年 9 月 Deloitte Touche Tohmatsu 香港事務所出向
2015 年 9 月 有限責任監査法人トーマツ東京事務所退所
2015 年 10 月 三浦真公認会計士事務所 創業（現在に至る）
2026 年 3 月現在、経営顧問、CFO、取締役、監査役として多数の企業を支援。経営塾やセミナーでの講演、大学や高校、地方自治体での講義、商業出版での執筆などを通じて経営や会計等に関する知見を発信している。公益財団法人や認定 NPO 法人の役員として公益活動にも携わる。

当時の私の生活は、とても華やかなものとは言えませんでした。むしろ振り返れば、艱難辛苦、という言葉がよく似合う時代でした。平日の昼間は大学で経済学を学び、授業のない日は資格試験の勉強に没頭する毎日でした。

私は在学中から公認会計士を志し、水道橋の資格学校 TAC に通いながら、東京大学総合図書館（本郷キャンパス）で勉強を続けていました。図書館が閉館するまで机に向かい、その後寮に戻るという生活でした。

同じ時期に、現在は一橋大学で教授をされている東京大学経済学部の先輩、松下幸敏さんと、朝から晩まで図書館で勉強していたことを懐かしく思い出します。松下さんは計量経済学、私は会計学や監査論を黙々と勉強していました。

東大 YMCA 寮での生活には、いくつか忘れられない思い出があります。まず、寮の食堂です。朝食と夕食が提供され、当時の寄宿舎費は月 5 万円ほどでした。奨学金を借りながら生活していた私にとって、この環境はありがたいものでした。勉強に集中するための生活基盤を支えていただいていたのだと、改めて感謝しています。

また、寄宿舎には朝の祈祷会がありました。私の部屋は祈祷会が行われる部屋の隣で、眠い朝も自然と祈りの場に足を運ぶことができました。祈祷会でメッセージを担当する日には、マ

タイによる福音書の「タラントンのたとえ」を取り上げることが多かったように思います。神様は人それぞれに賜物を与え、その賜物をどのように用いるかを私たちに委ねておられる。この聖書の言葉は、当時の私にとって大きな問いでした。自分に与えられている能力や機会を、神様の前でどのように用いるべきなのか。その問いは今も私の人生の中心にあるテーマです。

もう一つの思い出は、舎生たちとの議論です。中国、韓国、台湾から来た留学生の仲間たちと、東アジアの歴史や政治について朝まで語り合うこともありました。領土問題をどう解決するかというテーマで議論した夜もあります。歴史を振り返る中で、19 世紀のアヘン戦争など西洋列強の介入が東アジアの歴史を大きく変えたのではないかという話になりました。そして最後には、「東アジアが協力すれば、アメリカやヨーロッパ以上に魅力的な地域になるのではないか。だからケンカはやめよう」という結論に落ち着きました。若い学生同士の議論でしたが、国境や文化を越えて本音で語り合えた時間は、私にとって大きな財産です。

そして何より印象に残っているのは、勉強の日々です。当時、公認会計士試験の勉強を必死に続けていました。寮の部屋で電卓を叩きながら問題を解く時間が続きました。当時はお金もなく、将来への不安もありました。しかし、そのような時期にこそ、神様への祈りと信頼が深められていったように思います。振り返れば、あの試練の時間も神様が私を鍛え、備えてくださる過程だったのだと思います。

その後、私は監査法人トーマツに入所し、2007 年 8 月の公認会計士試験に合格しました。2011 年に公認会計士登録を行い、2012 年には Deloitte 香港事務所に赴任する機会にも恵まれました。2015 年に独立し、現在は多数の会社で経営顧問や取締役、監査役を務めています。また大学や経営者団体などで講演・講義を行い、著作活動にも取り組んでいます。

私の人生の土台は、東大 YMCA 寮で過ごした日々の中で形づくられました。あの時代、私はまだ何者でもなく、ただ必死に学び、祈り、歩み続けていました。しかし振り返ると、神様はあの小さな寮の部屋での時間を通して、私を形づくってくださっていたのだと思います。

最後に、東大 YMCA 寮で生活する寮生の皆さんに、ひとつお伝えしたいことがあります。ぜひ、自分に与えられている使命は何かを、寮での生活の中で考えてみてください。神様は一人ひとりに賜物を与えておられます。そして、その賜物をどのように用いるかを通して、それぞれの人生の召命が少しずつ明らかになっていくのだと思います。

この寮で捧げられてきた祈りが、これからも神様の摂理の中で豊かに用いられ、与えられた賜物を生かして、それぞれの召命へと歩む若者たちを育てていくことを祈り願っています。

東大 YMCA のおかげさまで

半田 淳比古（2008 年医学部医学科卒）
在舎 2004 年 3 月-2008 年 3 月



略歴・近況
武蔵野赤十字病院、都立小児総合医療センター、聖路加国際病院、マサチューセッツ総合病院、アイオワ大学病院を経て、ハーバード大学ボストン小児病院放射線科。フェローシップ研修教育責任者。趣味はハイキング。

「おかげさまで」という言葉は英語でどう訳したらよいのだろうと時々思う。Thanks to you でも間違いではないのだけれど、そこに込められた「色々と支えられて何とか今がありますよ」という思いまでは、どうも十分に伝わらない気がする。全く言葉は違うけれど、「ふわふわ」という言葉もそうだ。Soft と言えば意味は通じるかもしれないが、あの空気を含んだ軽やかさまではどうにも伝わり切らない。言葉というのは不思議なもので、ふとしたきっかけでそのもつ意味の豊かさに気づかされる。

僕にとって「おかげさまで」という言葉を一番実感する存在が、東大 YMCA である。入舎の最初のきっかけは、父・武比古であった。教育熱心だった父に叱咤激励（？）されて受験生活をくぐり抜け、駒場から本郷へ移るにあたって、父がかつて過ごした東大 YMCA に入ろうと思ったのは、自分にとってごく自然な流れだったように思う。

はじめてご挨拶に伺った際、父と母が大変お世話になった加藤せつ姉に温かく迎えていただいた。初めて訪れたはずなのに、どこか懐かしい空気を感じたのをついこの前のことのように覚えている。作文を提出し、ありがたいことに入舎面接に通していただいた。加藤姉は退舎後も食事に招いてくださって、今も心に残る存在である。お亡くなりになって久しいが、どれだけ時間が経っても電話帳から番号を消せない人というのがいる。加藤さんは、そのお一人だ。

入舎してしばらく経った頃、食堂での何気ない会話からソフトボールに誘ってくださったのが松下幸敏兄だった。中学生の頃に野球をしていた話をしたことがきっかけだったと思う。その流れで渋谷の恵約宣教教会のソフトボール試合に参加し、やがて毎週通うようになり、イエス・キリストを信じ、洗礼を受けることになった。僕が楽しそうに教会生活を送る姿を見てか、妹も教会に通うようになり、今では松下兄と結婚して三児の母となっている。寮の先輩、教会の兄弟が、気がつけば義理の弟にもなっているのだから、ありがたいご縁である。

斜めの部屋に住んでいた西浜悟史兄には、寮生活で本当にお世話になった。一緒にゲームをし、食事をし、時に勉強もしながら、他愛のない話を重ねた日々は、今思い返しても温かい記

憶である。同じ教会に通い、その後西浜兄も洗礼を受け、ともに教会に仕えるようになった。彼の洗礼式は自分の事のように嬉しかった。

丸川正吾兄、王嶺兄、甘木大己兄、村上善道兄、そして千葉高の同級生でもあり東大 YMCA でも一緒だった西岡宏晃兄など、挙げればきりがないほど多くの方々のおかげで今日がある。今はボストンという異国の地に住んでいるけれど、ひょんなきっかけでここボストンの地で田川義之兄に再会でき、その後日にはオンラインで卒寮生座談会にも参加させていただいた。遠く時間も場所も違っていても、画面越しでさえ、一瞬で時間と距離は越えられるものだと実感した。司馬遼太郎はかつて街道を空間的存在そして時間的存在と語ったけれど、僕にとっては東大 YMCA がそれかもしれない。

弟の秀雄も一時期東大で文学を学び、東大 YMCA で生活していた。後に信州大学へ進み、現在は神経内科医として研究と臨床を頑張っている。将来が楽しみだ。

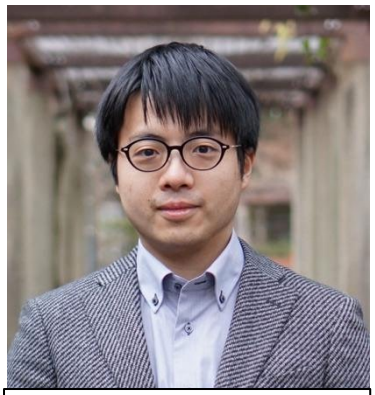
自分を含めて五人兄弟姉妹の家庭で育ったこともあり、学生時代は小児科医を志していた。それがいつの間にか小児放射線という専門分野に惹かれ、さらにアメリカでのトレーニングを志し、今に至っている。一人前の小児放射線科医と数えられるようになってしばらくたち、日々も、一年すらあっという間に過ぎていくけれど、ふと何かのきっかけで立ち止まり、東大 YMCA で過ごした日々を振り返るたび、「おかげさまで」と思わずにはいられない。

と同時に思う。果たして自分は、誰かのためになれているだろうか、と。願わくば、受け取ったバトンを次の誰かに渡せんことを。

熟議を尽くす―寄宿舎生活を振り返って

木原　盾（2015 年文学部卒）

在舎期間：2012 年 4 月―2017 年 8 月



略歴・近況：ブラウン大学大学院博士課程修了後、東京大学社会科学研究所学振特別研究員 PD を経て、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科（通称、慶應 SFC）専任講師。最近は 1 歳息子の子育てで忙しい毎日です。

私が東大 YMCA に入舎したのは 2012 年 4 月、駒場から本郷（文学部社会学研究室）へ進学するタイミングでした。女性入舎が始まる 2 年ほど前のことで、そこから交換留学による 10 ヶ月ほどの不在期間を経て、米国に学位留学を始める 2017 年 8 月まで、足掛け 5 年半ほど在舎しました。舎内では聖研部、のちに総務部に所属し、2015 年から退舎するまでは学生主事を務めました（学生主事は同じ社会学研究室の先輩であった税所真也兄から引き継ぎました。）

退舎から月日が流れましたが、寄宿舎生活の経験の中で、今もなお私の宝であり続けているのは、総会において全会一致を目指し、熟議に熟議を重ねた経験です。当時は（今も？）「全会一致の原則」があり、舎の制度やルールは、全員の合意がなければ変更されませんでした。全会一致を目指すプロセスでは、たとえ異論が一人であっても、相手の意見を根気よく聞き、合意に至ることが求められます。私の在舎時には総会における長時間の議論が幾度となくありました。

特に印象に残っているのは、入舎から一週間も経たないうちに開催された月一度の木曜総会が、深夜 1 時ごろまで続いたことです。その夜、議論になっていたのは早天祈祷会のルール変更でした。当時は（今も？）、早天祈祷会は朝 7 時から、日曜・木曜を除く毎日（土曜・祝日含む）行われていました。提案は「（総会が深夜に及ぶことが多いため）総会翌日の金曜日に限っては、早天祈祷会を休みにする」という内容だったと記憶しています。提案が出された背景には、当時の（今も？）総会が 21 時に始まり、日を回っても続くことが珍しくないことがありました。

入舎 1 週目で右も左もわからなかった私は、この件に強いこだわりはありませんでした。しかし、総会が行われていた 3 階の談話室は重い空気で、「安易な理由で早天祈祷会の開催日を減らしてよいのか」「そもそも早天祈祷会は何のためにあるのか」といった熱い議論が交わされていました。当時 20 歳の私としては「ここまで議論するのか！」という驚きが強く、その時に自分が座っていた位置や、説得されるまで制度変更に反対されていた先輩のことを覚えています。

結局、その議案は深夜に全会一致で可決されました。その後の寄宿舎生活で、「キリスト者たらんとする者」の定義、女子入舎、留学生枠の拡大など、おそらく東大 YMCA の歴史の中

で何度も繰り返されてきたであろう（そして現役舎生の方々は今もされているであろう）議論に立ち会いました。5 年半の寄宿舎生活を通して、私は制度を「ニーズに合わせて柔軟に変更することの大切さ」と、同時に「安易に変更することの危うさ」の両面を、身を以て理解するようになりました。

外から見れば、東大 YMCA は「東大生」×「キリスト教」×（当時は）「男性」という共通点を持つ同質的な組織にみえたでしょう。確かにそういう側面もありますが、そうした共通点があるにも関わらず（あるいは、あるからこそ）、意見が激しく食い違うことがあったのだろうと思い返します。

当時は「ここまで議論するのは時間の無駄ではないか」「多数決で決めればよいのではないか」と思うこともありました。しかし、「倫理的にも論理的にも、その意見は絶対に違う」と強く反発したくなるような主張をする相手であっても、共に暮らしながら議論を尽くすと、不思議とその人の背景や人となりが見えてきます。そして、その主張が、その人の歩んできた人生に照らせば、神様が与えた「良心」に基づいているものであると気づかされることが多々ありました。

現在は多くの職場でリモートが主流となり、対面で膝と膝を突き合わせて人と深く関わる機会が減っています。そうした中で、私には東大 YMCA での 5 年間があったからこそ、現在の大学教員としての仕事においても、同僚の教職員の方々との「調整」を楽しんだり、学生との「対話」をしたり、自分とは全く異なる主張を持つ人に対しても、その人なりの「背景」を想像したりすることができるようになっていると感じています。

ある時、故・原田明夫理事長が「もう内容は覚えていないのだが、寄宿舎で皆で真剣に議論したということだけは覚えていて、今では楽しい思い出になっている」という趣旨のことをにこやかに話しておられました。当時現役舎生だった私は、舎内がとある議題で紛糾している最中だったこともあり、「結局は忘れてしまうような議論なら、する意味がないのではないか」と内心考えたのを覚えています。しかし、今は当時の原田理事長の発言の意味が身に染みてわかるようになりました。

時代の要請に合わせて形を変えるしなやかさを持ちながらも、熟議を尽くす東大 YMCA の伝統が次世代へと継承されていくことを願っています。

与えられた恵み

木原（金子）友紀（2017 年教育学研究科修士修了）
在舎 2015 年 3 月―2017 年 2 月



略歴・近況：2017 年、東京大学に入職。2022 年には日本学術振興会ワシントン D.C.オフィスに出向して米国で生活しました。現在は、育休中に東京大学大学院教育学研究科博士課程に進学し、高等教育論を学んでいます。

信仰の土台

東大 YMCA への入舎に導かれたことによって受けた恵みは計り知れず、それは在籍していた 2 年間をこえ、人生を通して持続していくのだろう、と感じている。クリスチャン・ホームで育ったわけでもなく、また大学の寮への入寮が叶わなかった、という消極的理由が契機となり東大 YMCA の入舎選考を受けた私にとって、結果的にここで生活する機会が与えられたことは、「自分で選び取ったもの」というよりも、「与えられたもの」であった。このエッセイを通して、与えられた恵みについて、立ち止まって振り返ることで、東大 YMCA への感謝を表す機会としたい。

東大 YMCA での 2 年間を通して学んだこと、そして、その経験がその後の生き方に与えた影響を考える時、最大の恵みは、他者の心からの祈りに間近に触れることができたこと、そして、一見、順風満帆に見える人々も、実は心の奥底に満ち足りなさや、外には表すことのできない悩みや葛藤を抱えて生きているのだと知ったことであったように思う。

24 時間 365 日、寝食を共にする生活においては、「順調な自分」だけを見せ続けることはできない。早天祈祷会では、多様な学問分野を専攻する舎生一人ひとりの思考や祈りに触れることができた。単に自分のこと、研究のことだけを考えているのではなく、信仰や舎のあり方について真剣に考えたり、神と向き合おうとしたりする姿を間近で見るたび、心が揺さぶられるような思いになったことが、何回かある。もちろん、それは頻繁に起きることではないし、むしろ普段は、和気藹々とした雰囲気の中、温かくて美味しいご飯を他の舎生と一緒に食べるなど、穏やかな生活であった印象が強い。しかし、ノンクリスチャン家庭で育った私にとって、クリスチャンが、どのような祈りを、どのような時に、どのような思いで捧げているのかは、日曜に教会に行って礼拝するだけでは、必ずしも知ることはできなかった。毎週教会に行くことさえ、しばしばままならなかった私にとってはなおさら、同じ世代を生きる舎生の祈りを知ることは、それだけでかけがえのない時間であったし、10 年経った今振り返っても、最も強く、記憶に刻まれている。

女子舎生としての生活と、企画部の思い出

おそらく、東大 YMCA が男女共同寮となって以降の様子を実際に知る一人として、女子舎生としての生活を記すことは 1 つの義務でもあるのだろう。私が入舎したのは 2015 年 3 月末であり、2014 年 4 月の女子舎生受け入れ開始以降、すでに 7 名以上の女子学生が入舎してい

た。このため生活上の制約や不自由さを感じたことは、ほとんど記憶していない。思い返せばOB・OG座談会にいらっしゃる先輩方が、口を揃えて「舎の雰囲気が良くなった」とおっしゃって下さったことも、どこかで舎生としての存在を肯定されたように感じ、東大YMCAに住む安心感に寄与したように考えられる。

この記念誌の編集委員としてお声がけをいただいたことで、当たり前に受け止めてきた舎生活の基盤には、実は10年以上もの長期的な議論の積み重ねと、物理的な準備（複数の改装等）があったことを、今になって知った。そして、年表上の記録に文字として現れることはないが、これらの背後には、関係者による多くの祈りもあったのだろう。そのことを思うと、YMCAの諸先輩方に対する感謝の念を、新たにせずにはいられない。ぜひ、この記念誌を通して、当時どのような議論がなされたのかを、私自身改めて学ぶ機会になればと思っている。

舎では企画部に所属していたが、最も印象深い思い出の一つは、あるOB・OG座談会で、清水正之聖学院大学学長、山口栄一京都大学大学院教授、合田隆史尚絅大学学長（肩書は全て当時のもの）をお招きしたことである。具体的な内容の記憶は薄れているものの、今でも印象に残っているのは、「YMCAのDNAを受け継ぐ」といった趣旨のお話がなされたことだった。これは、先輩方が入舎された当時、旧舎から数名の方が新舎に住まわれて、東大YMCAのDNAを伝えるとともに、旧舎の記録をまとめたというお話だったと記憶している。当時、舎に住むことの意義を全く深く理解していなかった私にとって、その言葉は新鮮であり、同時に、「自分はそのDNAを受け継いでいるのだろうか」と自信が持てなかった。当時は十分理解できていなかったが、今になって振り返ると、それは早天祈祷会や、食堂での普段の語り合いといった、ささやかな日常の営みの中に息づいていたと思う。

現在に至る繋がり

朝の賛美と祈りで一日を始め、聖書研究会やOB・OG座談会など、月に何度も舎へのコミットメントが求められる生活は、社会人となった今、意識的に再現しようとしても不可能である（実際、退舎直後には、一人で早天祈祷会を続けられないかと試みたが、続かなかった）。同時に、職場での人間関係や優先順位の選択など、学生時代には想像していなかった困難にも日々直面している。それでも、忙しい日常のどこかで、立ち止まることの大切さや、祈りを通して与えられる平安を感じられるのは、東大YMCAでの生活があったからこそだと思う。

入舎する際に常に問われた「キリスト者、あるいはキリスト者たらんとする者」という問いは新たに入舎してくる方々に向けられたものであったが、今振り返ると、同時に選考を通して自分自身に向けられていく問いでもあったように思う。そして現役舎生であるときは思いもしなかったのだが、おそらく自分自身にこれから一生ついてまわる問いになっていくのかもしれないと思う。自分は昔も今も、弱く未熟な存在であるし、家庭を持ち、子供を育てるようになってからは特にそれを感じる。しかし、弱い存在であるからこそ、祈ることで得られる平安と、長い人生の中でたとえ道を外れたとしても、戻ってこられるような土台が、東大YMCAでの生活を通して与えられたことに、心から感謝している。

神様を求める気持ちを大切に

徳永（草間）友花（2018 年工学系研究科博士修了）
在舎 2015 年 3 月―2018 年 3 月



略歴・近況：
2019 年科学技術振興機構(JST)研究開発戦略センター(CRDS)フェローを経て、2024 年 4 月から東京大学農学生命科学研究科附属演習林フォレスト GX/DX 協創センター・特任准教授（副センター長）。現在、0 歳 10 か月の男の子を子育て中。

仏教育ちのクリスチャン一世

私は曹洞宗という仏教の家庭で育ちました。法華経もとても有難い書物ということですが、難解な漢文や書き下し分を読んでも、理解することができませんでした。自分にもっと教養があれば・・・と悩みましたが、結果として、それがキリスト教に出会うきっかけになりました。キリスト教は世界で最も多くの信者がいる宗教ということで、興味を持ちました。聖書は現代語で読みやすく、解釈が難しいところでも、牧師先生や仲間が一緒になって教えてくれ、考えてくれました。手の届かない孤高の神を崇めるというより、神様の方から歩み寄ってくれるような親しみを感じ、クリスチャンになりました。

東大 YMCA との出会い

我が家は裕福ではなかったので、北海道にある実家から出ることを考えていなかったのですが、東大の博士課程は給付型の奨学金などがあり、進学を決めました。博士課程 1 年目は月額 12 万円でした。アルバイトをせずともももらえるお金としては十分な額ですが、東京で一人暮らしができる金額ではありません。なんとか安いところはないものか、クリスチャンの人が安く部屋を貸してくれないものか・・・と検索していたら、東大 YMCA の HP を発見しました。光熱費・食費込みで五万円のクリスチャンの寮、ぜひ入りたい！と思いました。ちょうど、少し前から女子入寮が可になっていることも運命を感じました。入舎面接は和やかに進み、すぐに合格通知をいただくことができました。

寄宿舎の中にある多様性

東大 YMCA には、想像していた以上の多様性がありました。年代も 10 代～30 代と幅広く、出身も色々な国や都道府県の人がおり、文系・理系とそれぞれの専門性がある人、クリスチャンホーム育ちの人もいれば、私のように仏教家庭出身の人もいました。また、同じキリスト教の中でも、日本キリスト教団や、福音派、ペンテコステ派、長老派など様々な宗派があるということがわかりました。それぞれが違う宗派にも関わらず、同じ神様を信じているという感覚があり、寄宿舎の中には不思議な調和がありました。

早天祈祷会で分かち合う神様との向き合い方

早天祈祷会では、様々なトピックがありましたが、特に神様との向き合い方を分かち合うことができることが、興味深かったです。祈りの中で気づかされたことを分かち合ったり、心の中の葛藤を神様にぶつけてみたり、どれも真剣なものでした。伝道のために殉教した人たちのことを感謝だという人もいれば、なぜ神様は自分を信じる人にそのような仕打ちをするのか、と困惑する人もいました。（今思えば、朝から中々ヘビーな話題もしばしば・・・）

神様を求める気持ちを大切にしたい

私は東大 YMCA に入る数年前に洗礼を受けていて、教会にも通っていたのですが、クリスチャンホーム育ちの人達は、やはり 2 歩も 3 歩も進んでいるように見えました。讃美歌をたくさん知っていたり、聖書を開くのが早かったり、聖書箇所の解釈が早かったり、理解が深いように感じました。聖書研究会は結構内容が難しく、ノンクリスチャンの人にとってはもっと難しいのではないかと感じました。

東大 YMCA には、聖書の考え方やそのもっと前段階の基本中の基本について、知れる機会が少なかったことから、2019 頃には「ノンクリスチャン向けの聖書の学び会」を開催しました。東京マルチカルチャル教会（TMC）の Jonathan Prins 牧師先生ご夫妻の協力の中、キリスト教についてまったくゼロから学ぶことができる時間を持つことができ、思っていた以上に活発なディスカッションが出来ました。キリスト者たらんとする者として入舎したけれど、キリスト教のことは全然わからない！という人にも、広くキリスト教に触れることができるような機会をこれからも作っていきたいです。資金提供をしていただいた沖見勝也さん、梶村慎吾さんには、この場を借りて深くお礼申し上げます。

また、この活動を通じて交流を始めた関口哲生さんには、私を理事に推薦していただきました。これからも、信仰の面だけではなく様々な観点から、現舎生に寄り添えるような存在でありたいと思っています。

謝辞

最後に、東大 YMCA で一緒に過ごし、喜びも悲しみも分かち合ったみんなへ感謝の気持ちを記します。とても楽しく、かけがえのない時間を過ごすことができました。また、事務局の桃井明男さん、明神恵子さんには家族のように暖かく接していただきました。厨房の片桐幸夫さんには、毎日おいしいご飯を作っていただいて、私たちの食を支えていただきました。ここに記して、心から謝意を表します。

（編集：　山口 栄一）